

国営アルプスあづみの公園 大町・松川地区開園記念

市立大町山岳博物館 平成21年企画展

# アルピニズム誕生 昭和初期の鹿島槍ヶ岳登山史

- 主催 市立大町山岳博物館
- 会期 平成21年〔2009〕7月4日（土）～8月30日（日）  
会期中無休
- 開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
- 会場 市立大町山岳博物館 特別展示室・ホール
- 観覧料 大人400円 高校生300円 小・中学生200円  
※常設展示と共通割引、30名様以上の団体は各50円引  
そのほかの各種割引についてはお問い合わせください。

・表紙 鹿島槍ヶ岳 荒沢奥壁（柳沢昭夫撮影）  
・裏表紙 小谷部全助 山日記（大町山岳博物館蔵）



## ご挨拶

---

このたび、大町に鎮座する鹿島槍ヶ岳（2,889m）を愛する多くの方々のご協力により「アルピニズム誕生 昭和初期の鹿島槍ヶ岳登山史」を開催する運びとなりました。

大正末期から昭和初期にかけて、北アルプスを中心にして日本登山史上重要な画期となった時期にあたります。それ以前の登山路を利用した夏山登山から、積雪期登山、岩登りへとより難度の高い登山が試みられるようになった時期にあたり、その推進力となったのが若い大学山岳部の学生であり、時代背景には第一次大戦以降、大正期の景気の浮揚期にあたり、海外からのアルピニズムという登山思想の流入があげられます。

日本国内でこの思想の展開、実践した主要な舞台のひとつとなったのが、北アルプスの鹿島槍ヶ岳・北壁と荒沢奥壁です。そこでは岩と雪のバリエーションルートの開拓がなされ、数々の冬期登攀の記録が打ち立てられていきます。本企画展では、彼らの登攀記録を掘り起こし、北アルプスの最も困難な冬期登攀における記録を紹介し、日本におけるアルピニズムの展開を振り返ります。

企画展開催にあたり、監修を頂きました松永敏郎氏、宇津力雄氏、また玉稿を頂きました児玉茂氏、松本憲親氏には一方ならぬご支援を頂き感謝を申し上げます。

この企画展が、北アルプスそして岳都大町へのより深いご理解の一助となり、当時の山岳文化に思いを馳せ、これからの大町と登山文化を考える機会となれば幸いです。

ご高覧のほど、お願いを申し上げます。

平成21年7月4日

大町山岳博物館

## 山岳文化都市宣言

---

私たちの大町市は、雄大な北アルプスのパノラマを代表とする、四季折々の変化に富んだ豊かで美しい大自然に恵まれています。

北アルプスの山麓で生まれ、育ってきた市民は、その長い歴史を通じて、山岳がもたらす豊かな自然環境の恵みを受けながら、自然と人との共生する独自の山岳文化を形成してきました。

私たちは、先人たちが守り育ててきた山岳文化を受け継ぎ、かけがえのない豊かで美しい自然を次の世代に伝えていかなければなりません。

21世紀を迎えた今日、身近な生活環境の改善から地球環境の保全まで、様々な環境問題への取り組みが重視される中で、本市においても、市民、事業者、行政等が協働と連携を図りながら、新しい時代の課題や要求に応える山岳文化の振興が求められています。

本市における山岳文化の拠点である山岳博物館50周年の節目にあたり、山岳博物館創設時の理念に学びながら、「環境の世紀」と言われる21世紀にふさわしい山岳文化の発展と創造をめざして、大町市を自然と人との共生する「山岳文化都市」とすることを宣言します。

平成14年3月15日

大町市

# 目 次

ご挨拶

山岳文化都市宣言

I. 鹿島槍ヶ岳の積雪期登攀とアルピニズム……………	(柳澤昭夫) 1
II. 冬季 後立山の唐松岳から鹿島槍ヶ岳縦走の記録と考察……………	(柳澤昭夫) 8
III. 雪の鹿島槍ヶ岳、五龍岳からヒマラヤへ……………	(柳澤昭夫) 10
IV. 早春の黒部川側より鹿島槍ヶ岳、五龍岳……………	(堀田弥一) 11
V. 早大山岳部による鹿島槍ヶ岳北壁主稜の初登攀……………	(児玉 茂) 15
VI. 昭和初期の登山技術……………	(松本憲親) 17
VII. 京都帝国大学旅行部の極地法による富士大沢口冬期登山について……………	(松永敏郎) 30
VIII. 積雪期を中心とした鹿島槍ヶ岳登山史年表……………	34
IX. 鹿島槍ヶ岳登山史関係参考文献……………	35

## 凡 例

1. 本書は、市立大町山岳博物館において平成21年7月4日(土)～8月30日(日)まで開催の企画展「アルピニズム誕生昭和初期の鹿島槍ヶ岳登山史」の展示解説書である。
2. 写真や図表などの図版に付した番号は、展示写真・図表パネルや展示資料の解説プレートの番号と対応するものではない。なお解説書作成に際して使用させて頂いた写真等については引用文献を記載し、特に掲載のないものについては、山岳博物館による撮影、あるいは所蔵資料による。
3. 企画展の企画並びに関連イベント等は当館学芸員・清水隆寿、館長・柳澤昭夫を中心に、副館長・宮野典夫、学芸員・清水博文、学芸員・千葉悟志、事務員・岩田直美による。
4. 本書の編集は清水隆寿が行い、執筆はI. II. IIIが柳澤昭夫(館長)、IV. が堀田弥一氏の『ヒマラヤ初登頂』(筑摩書房・1986)よりの再録、V. は児玉茂氏(東京都世田谷区・稲門山岳会)、VI. は松本憲親氏(大阪市都島区・岳僚山の会)、VII. 松永敏郎氏(東京都杉並区・日本山岳会)より玉稿を賜った。感謝を申し上げます。
5. 昭和初期のカメラに関する展示解説並びに展示品は、宇津力雄氏(東京都練馬区・日本山岳会会員、日本カメラ博物館友の会会員)の助言によった。また本企画展にあわせて制作した北アルプスの模型は、地元大町市で民話と紙粘土の制作を通じて活躍しておられる大町民話の里づくり「もんべの会」の皆さんの全面的な協力によった。  
その他、お世話になりました皆さまのご芳名につきましては、謝辞に記載させていただきました。
6. 今日の人権意識に照らして不適切と思われる語句や表現については、当時の時代背景と原作の価値に鑑み、そのままとしたものがある。

# I. 鹿島槍ヶ岳の積雪期登攀とアルピニズム

## ～大正末から昭和初期の鹿島槍登山～

柳澤 昭夫

### アルピニズム誕生

ヨーロッパでは、アルプスは信仰の対象ではなく、むしろ、山は悪魔の住むところとして恐れられていた。こうした山が、遊びやスポーツの対象として登山されるようになるのは、世界に先駆けて産業革命に成功したイギリスのブルジョワジーが世界旅行とともにアルプス登山にスポーツとして挑戦したのが、近代登山のはじまりと言われている。つまり、ブルジョワジーの一種のステータスとして登山は始まったと言える。もちろん、アルプスを郷土とする地方の人々がアルプスの高峰登山のパイオニアであったことは間違いない。しかし、1850年代に入り、植民地政策に絡んだ冒険精神と産業革命を成功させた社会的繁栄も影響して、高峰のスポーツ的登山をリードするのは、世界最古の山岳会を誕生させたイギリスの人々である。登山の黄金時代と言われる、アルプスの高峰初登頂時代は、アルフレット・ウイルスのヴェツターホルン（3701m）の登頂に始まり、ウィンパーのmatterホルン（4478m）の登頂で幕を閉じる。ついで、処女峰でなくても未踏の山稜や、岩壁を登攀する時代がくる。1882年（明治15年）、ダン・デュ・ジェアン（4013m）双頭峰初登頂など銀の時代を経て、ガイド無しの登山、ピトンやロープを積極的に用いて、鋭い岩峰や岩壁を攀じ登るスポーツ的な登山の時代に入る。

この時代を代表するクライマーが、A・F・マンメリー（現在はママリーと訳されている）（1855～1895年）である。matterホルンのツムット山稜やシャモニー針峰群のエギュー、グレボンの初登攀を行い、コーカサスからナンガパルバットに向かい、彼の地に逝った。彼は、初登頂の時代は終わっても、困難な岩壁に無限の領域があり、そこにスポーツ登山の課題を求めた。こうした主張は、登山界にママリイズムとして大きな影響を与えた。ママリイズムは、より困難な岩壁や厳しい積雪期の登山を追求する、アルピニズムとして近代登山の一大潮流になる。

日本における登山が、信仰のために立山や御岳に登った講の登山に変わって、遊びとしてあるいは、スポーツとして山登りをするようになったのは、ウェストンらの影響を受けた明治以降のことである。もちろん講の登山にも、信仰のためばかりでなく、物見遊山的に楽しむ側面も持っていた。明治以降の登山は、「講」の登山も続いていし、学術的調査研究登山や測量のための登山が行われるとともに、スポーツ的登山が展開され、日本アルプスの初登頂や積雪期の登頂が展開される。

日本の近代登山は、当時日本に産業技術の指導等で来ていた外国人による日本アルプスの登山やヨーロッパから帰国した人の知識や技術、用具の影響が大きい。同時に、当時の大学山岳部員や日本山岳会員は、「山人」達の支えと山での生活の知恵や経験を学ぶとともに、洋書文献を取り寄せて読み、恐らく手探りで学習した知識や技術によって始まったと言える。

1921年（大正10年）榎有恒は、アルプス中の最も難しいとされていたアイガーの東山稜を初登攀した。世界的にも大きく評価される登攀であるとともに、榎のもたらしたアルピニズム的登山の方向、知識、技術、用具などに関する影響は大きかった。榎の出身である慶応大学山岳部はもとより、日本山岳会や各大学山岳部は、未知な領域での、困難なクライミングを求めるアルピニズムを目指し大きく舵を切ってゆく。日本アルプスの積雪期登山や岩壁のクライミングがアルピニズムの課題として、雪中露営や登攀技術、用具について研究され、ピトンやロープを使う登山が展開された。

その頃、学生登山のバイブルとして読まれていたママリーの「アルプス・コーカサス登攀記」の影



めたに終わった。1935年（昭和10年）3月には主稜線を縦走してキレットからアタックする予定であったが、悪天候のため、大遠見から落ちる支稜にキャンプを設けて攻撃したが失敗した。1936年の攻撃はなんとしても完登するぞと言うすさまじい闘志を持って行われた。12月31日難波、小林の2名が攻撃するが積雪多量のため、100mほどの登攀で終わる。この日、尾関、山田の2名がキレット小屋にサポート、食料を荷揚げする。1月2日小西、村田の両名により2回目のアタックが行われた。31日の難波らによる苦闘のラッセルに助けられ順調に進むかに見えたが、降雪が始まるとともに、深い雪のラッセルと塵雪崩に苦闘する。頂上下50mほどの傾斜の緩い雪稜上については午後7時で、そのままツェルトビバーク。しかし、それから後が大変であった。翌日は吹雪の中、キレット小屋を目指す。荒れ狂う風雪の中、ルート判断に苦しみながら午後1時過ぎには、キレットのおりくちに着くがおりくちが分からない。風が収斂（しゅうれん）して通りぬけるキレットは、すさまじい風雪、困難な通過になった。悪戦苦闘の末またもやキレットの底でビバークになる。その夜はことのほか辛いビバークになった。翌日も吹雪、やっとのことでキレット小屋にたどり着く。12時（正午）を回っていた。そこには、明大山岳部と慶大医学部と人夫がいた。食糧は、サポートが上げた5箱の携行食のみ、彼らの好意に甘えるより仕方がなかった。

一歩死の世界に踏み込み、凍傷を負いながら、見事に生還したこのすさまじい登攀は、キレット小屋で終わらなかった。2日から始まった暴風雪は1月10日になっても未だ止まなかった。食糧は不足、ついに燃料も底をつき始めた。明日はどんな天気でも、明大、慶応の人たちと冷小屋経由で大町に下る悲壮な決意をする。奇跡的に11日は天候が回復カクネ里経由でベースキャンプにもどることが出来た。当然のことながら、出発依頼連絡の途絶えた二人は、遭難の大騒ぎになっていた。しかし、特記すべき記録であると山崎安治は評価している。

1937年（昭和12年）3月には、北岳の登攀で力をつけた東京商大山岳部の小谷部全助と森川真三郎のペアによって、難関、鹿島槍荒沢奥壁北稜が初登攀される。小谷部らは、神城から入山し、今の五龍遠見スキー場、地蔵の頭付近にベースキャンプを設け、大遠見に第2キャンプを設け、前進基地とする。そこからカクネ里へ下り、カクネ里をつめ、「く」の字の雪渓あたりを登って天狗尾根にでて第3アタックキャンプを設けた。天狗尾根から荒沢北俣へ下降し北稜に取り付いた。

アタックキャンプを出発したのは、早朝5時。北稜に取り付いてから、M岩峰まで8時間かかった。M岩峰の登攀に苦勞し、北稜を登り終え、小屋岩についたのは23時、4時間ほど休憩し、天狗尾根をくだり、アタックキャンプに帰還したのは、翌日の11時30分であった。実に30時間を越える壮絶な、初登攀であった。

因みに、荒沢奥壁北稜の第2登は18年後の1955年（昭和30年）4月である。第2次世界大戦をはさんでいるとは言え、第2登まで、これだけ時間のかかったルートも少ない。今日でも困難なルートであるが、いかに困難な初登攀であったかを物語っている。

鹿島槍荒沢奥壁南稜を初登攀したのは、1941年（昭和16年）、浪高、甲南OBの東大（佐谷、伊藤）パーティーである。

鹿島槍のこの冬季初登攀が、あの有名なアルプス三大北壁の二つ、アイガーやグランドジョラス北壁の夏の初登攀より前であったことは特筆に値しないだろうか。いかにアイガーやグランドジョラスの岩

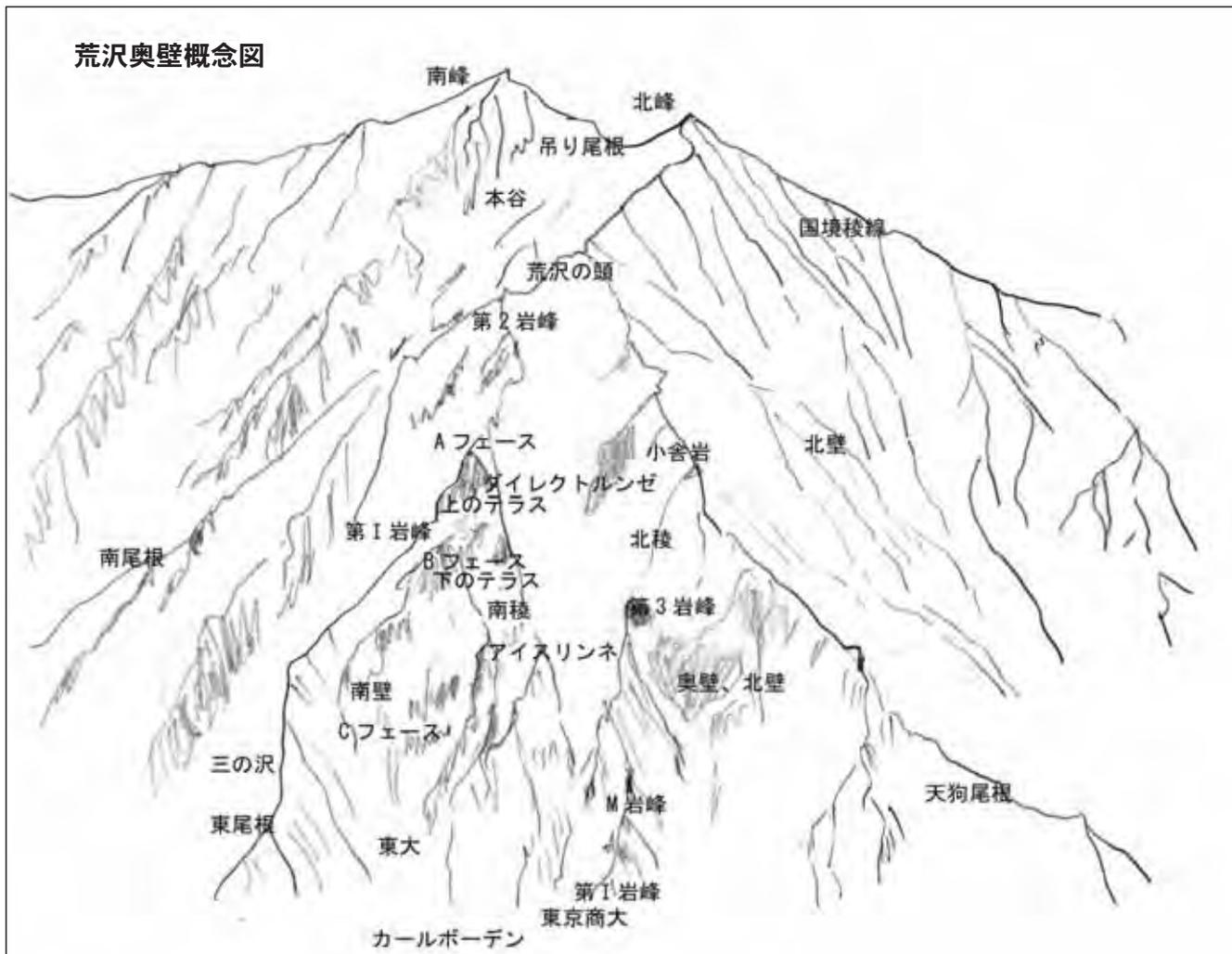


夏の北壁

壁のスケールが大きくても、夏の初登攀である。冬季の初登攀は、戦後のことである。

一方、鹿島槍ヶ岳のこの登攀は、黒部川添いにすさまじい冬の季節風が吹き荒れ、多量の降雪をもたらし、アプローチは雪崩が頻発する恐ろしい谷筋である。寒気、吹雪、豪雪、雪庇、きのこ雪など極めて厳しい条件下の登攀である。壁の大きさを割り引いても、鹿島槍のこの登攀は、当時のヨーロッパアルプスのバリエーション登攀に勝るとも劣らない、世界に誇るべき記録であると思う。しかも、1921年（大正10年）の榎によるアイガー東山稜初登攀によってもたらされたアルピニズム的登攀が始まってまだ十数年に過ぎない。この時期に早くも冬の鹿島槍を舞台にアルピニズムを本格的に追及する登山が展開された。

冬の登攀は、時としてマイナス30度を超える寒気、風雪、雪崩、人の力ではどうすることも出来ない厳しい荒天に翻弄される。生き抜くことに全力を傾けても力尽きるかも知れない不安に怯えなが



らの登攀である。考え得る限りの危険を排除しても、いい知れぬ恐怖が付きまとう。

今から70年前のクライマー達は、貧弱な装備と情報、全くベーシックな登山技術で、不安や恐怖と闘い抜いたに違いない。それは、未知なる領域に挑戦する者に共通する困難と恐怖だろう。

## アプローチと登攀ルート

小谷部全助の山日記を手懸りに、当時の積雪期鹿島槍ヶ岳登山のアプローチや登攀ルートを追ってみた。昭和初期の鹿島槍の登山は残雪の多い、谷やルンゼにルートがとられている。大冷沢側では西沢、中岩沢、布引沢、北俣本谷、同二ノ沢、同三ノ沢であり、荒沢では本谷南俣、そして北俣、同左ルンゼ、同右ルンゼ、そして、白岳沢、カクネ里である。

こうした彼らの足跡をトレースすることで、当時の世界的水準を超えたとも言える積雪期の困難な

クライミングを考察してみた。

多量の積雪を見る鹿島槍周辺の谷は、谷の両側の斜面から落ちる雪崩で、非常に大量のデブリ（雪崩で運ばれ堆積した雪）で埋まる。積雪の安定する4月、5月は雪崩をさけることは比較的容易であり、多くの谷の初登が6月になされていることを見ても、6月になればブロックの崩壊はあってもほとんど雪崩を心配せずにすむ。急斜面の雪は雪崩れ落ち、谷を埋め、多くの谷は最大でも40度で比較的傾斜が緩い。したがってデブリに埋まる谷は登りやすく、登頂ルートに設定しやすかっただろう。

鹿島槍ヶ岳は、まず、西沢をルートにした。赤岩尾根上部にでて、主稜線伝いに登頂している。

そして、本谷と周辺の中岩沢、布引沢などがルートに取られた。西沢同様山頂へは、主稜線を経由する。最も多く取られたのは、本谷である。残雪が繋がる7月頃までは、山頂への最短時間のルートである。夏になれば滝や岩場も出現し、雪渓は切れるが、例外として北俣本谷三ノ沢をのぞけば、困難な滝や岩場は出現しない。三ノ沢といえども残雪が多く、一箇所出現する滝を除けば、ほとんど7月までは雪で埋められているので登りやすい。しかし、10月の三ノ沢は、いくつもの滝が連続して現れるし、雪渓はズブズブに切れ、不安定なブロックが狭いルンゼに引っかかるように残り、何時崩落するか知れず、危険極まりなかった。本当に彼らはこの谷をアプローチに使ったのか信じがたい。主として、三の沢、二の沢は東尾根へのアプローチとして使われたと共に荒沢奥壁登攀後に下降路として積雪期に使われている。

鹿島槍東尾根の初登攀は、黒部で名高い冠松次郎である。1930年（昭和5年）8月、大冷沢北俣本谷の二の沢を詰めて、一の沢の頭と二の沢の頭との間にでて、東尾根から登頂した。下部の樹林帯の藪漕ぎを避けたと言うよりも、沢筋をルートにすることで登頂までのルート全体を把握しやすかったと考えられる。

1934年（昭和9年）の立教大学山岳部の積雪期初登攀は、東尾根末端からである。東尾根の概要が明らかになったからである。なお、甲南、立教などは、積雪期も二の沢を登下降している。東尾根には、第一岩峰、第二岩峰の難所があるが、第一岩峰手前から、又は第二岩峰で三の沢へ入り、第一、第二岩峰を左から巻いて南尾根のコルへ出ている。また、第二岩峰は右から巻いて本谷ルンゼを登っている。雪崩を見極めなければ取れないルートである。

荒沢最初の大滝は左岸の岩棚をへつっている。荒沢の南俣は両側を岩壁にかこまれた狭い谷であるが8月でも残雪が繋がりに、荒沢から東尾根へと登下降されている（9月以降は検証していない）。現在、南俣はほとんどトレースされないが、情報が少ないことと冬季は雪崩の危険が大きいことによるのだろう。今では、情報の多い東尾根が冬季は使われている。

荒沢北俣本谷は荒沢尾根の末端をまわり込んだところで8月以降は連続した7つほどの滝が出現し難儀する。浪高パーティはこの滝を、荒沢尾根側をトラバースして南俣に出て下降している。多くの場合は天狗尾根側のハイマツ伝いに高巻きしている。我々もそうした。この滝の上は荒沢奥壁直下のカールボーデン（氷河が削ったお椀のような地形）である。7月頃までは滝もせず全くスムーズに谷を登下降できる。カールボーデンを中心に、左ルンゼから東尾根へ、右ルンゼから天狗尾根へと登下降している。（小谷部山日記・三高生の遭難の頁参照）。この時、小谷部らは、荒沢から入山し、上の大滝は、天狗尾根側を高巻きし、カールボーデンに出ている。そして、右ルンゼから天狗尾根を登り、山頂から冷池方面に向かう途中、山頂付近で遭難者を発見している。



小谷部全助（生田正子氏提供）

カクネ里へは遠見尾根から入りやすく浪高や早大パーティーら多くのパーティーが北壁へのアプローチにしている。小谷部からもカクネ里から天狗尾根に登り荒沢へ下降し奥壁北稜を初登攀した。

カクネ里へは大川沢をアプローチにすることも困難ではない。ことに残雪期、四月頃までは荒沢出合からカクネ里まで谷は雪で埋まっている。

カクネ里から後立山主稜線へは口ノ沢、中ノ沢、キレット沢（奥の雪渓はまだ検証していない）、夏でも（8月末でも）残雪の谷をルートにすることができた。当時も今も情報の少ない、未知な領域と言えるが残雪の谷はルートを設定しやすかったと言える。

しかし、未知であるが故の困難をとまなうだけに、アプローチにおいて実践的にロープの技術やルートを設定する能力を鍛え、高めていくことができたと考えられる。彼らはグレンデで技術訓練するよりも、実際の山で、そのアプローチで山の概念を把握し、技術的訓練を行い、クライミングルートを設定する力を培ったと思う。

現代の我々は多量の情報をもとにし、東尾根や天狗尾根に安全なアプローチを設定できる。

しかも、それが当然のように。そしてその情報の範囲から未知の領域へと一歩も範囲を越えられない。なぜなら情報が自分で経験し集積した情報でないからである。

昭和初期、小谷部らクライマーにとって全ての谷や尾根、岩壁が未知の領域で冒険的であった。だからこそ彼らは、アプローチで、技術を訓練し、状況を判断する力を養い、自分で経験を集積していった。その延長上に荒沢奥壁や北壁の登攀が存在した。

最も驚くことは冬季も雪崩が収斂するこの谷をアプローチにしたことである。どこかで雪崩の危険に対する判断力、雪崩を回避する知恵を身につけたのだろう。

我々は東尾根、天狗尾根から谷底へ下降し奥壁や北壁へ取り付いた。荒沢やカクネ里こそアプローチにはしないが谷底へ入るという意味では雪崩に関する同じリスクを背負っている。

雪崩に関する多くの科学的知見を手に入れた現在でも、雪崩が出るかも知れないという予測は高めることはできたが、依然として雪崩は出ないという確信



荒沢に入る



荒沢

は得られないまま谷底へ下降し岩壁に取り付いている。科学的な予測というよりも雪崩の観察、多くの冬山経験の集積による「勘」で状況を判断している。全く彼らと同様である。彼らは恐れを知らない、恐いもの知らずの無鉄砲なクライマーではない。むしろ知的で文献を読み、一步一步経験を積み重ねた、極めて慎重なクライマーであった。未知の本谷、荒沢、カクネ里をアプローチにして、鹿島槍周辺のこの谷を登り降りする過程で、力を高めていったのだろう。



鹿島槍北壁と荒沢奥壁

登山における困難な課題を解決してきたのは、基本的には安全性を高

める防御の力であろう。それは技術的には確保技術の展開であり、状況を判断する力や荒天の中で生き抜く生活の知恵であり、雪崩を回避する知恵である。実践的に経験を集積し山を捉え、ルートを設定し、山登りを構成する力を高めてきたからである。

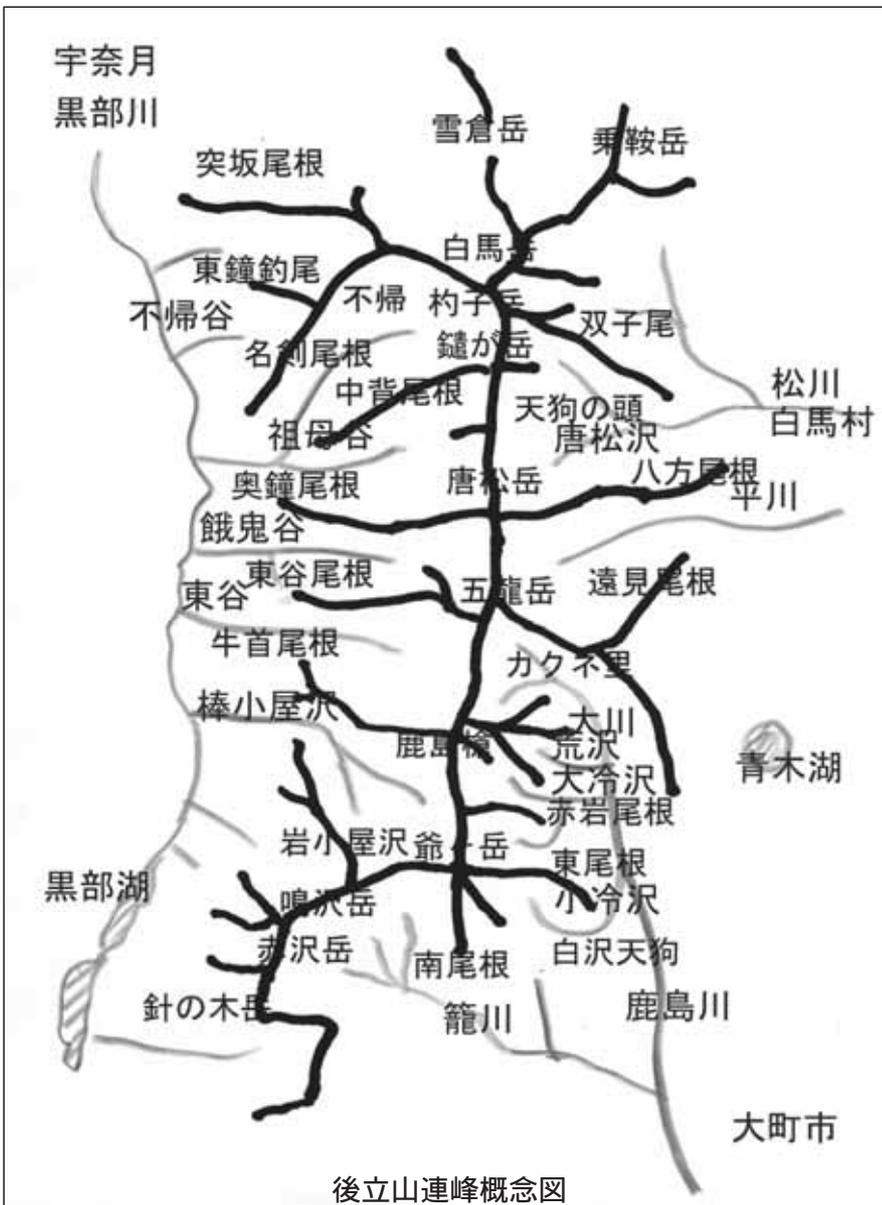
現代の登山にみられるように情報を集積し、知識を習得し、訓練で技術を身につけても経験という検証を経ない情報、知識や技術は、知恵として生きてはこないだろうし、山登りを構成する力にはならないのではないだろうか。

## Ⅱ. 冬季 後立山の唐松岳から鹿島槍ヶ岳縦走の記録と考察

柳澤 昭夫

伊藤愿をリーダーとする工楽英司、長谷川清三郎ら京大、三高パーティーは、1931年（昭和6年）3月26日から4月4日にかけて唐松岳から鹿島槍ヶ岳を縦走した。この記録は、『関西大学山岳連盟報告』第二号に乗った工楽英司の報告である。このコースの縦走は、山口勝氏（松本）、1930年に穂刈三壽雄氏がトレースしている（同報告）。ただし、山口、穂刈両名の登山は、厳冬期とは言いがたく、この伊藤パーティーの記録が積雪期初縦走として認めたい。

冬の季節風が、黒部川添いに吹き上げ、鹿島槍の牛首尾根にぶち当たり、悪天候と多量の降雪をもたらす。後立山の冬季の悪天候にどう対応すべきかが、エスケープする事の出来ないこのルートのもっとも大きな課題である。因みに後立山は、北アルプスでも強風が吹き荒れ悪天が多く、剣、立山について積雪量が多い。また、後立山では、遠見尾根、天狗尾根の積雪量が最も多く、針ノ木岳周辺になると風も弱まり、積雪量も減少する。穂高は晴天でも、後立山は吹雪と言うことさえある。強風と多量の降雪は、主稜線の積雪を吹き払い、固く凍ったアイスバーンを構成するとともに、巨大な雪庇を作り、雪崩を誘発する。



記録から考察すれば、未だ五龍小屋（1951年新設・昭和26年）、キレット小屋（1932年・昭和7年）、冷小屋（1922年・大正11年）は使用しなかったと考えられる。唐松小屋を使用して出発し、その後は、ツェルトザックを利用した三回のビバークを重ね走破している。主稜線は、信州側には、巨大な雪庇を形成するが、信州側は、急峻な地形で、雪庇は不安定である。また、稜線には雪洞を構築するだけの積雪が無い。可能であれば雪洞構築を恐らく視野に入れながら簡便なツェルトビバークを選択した。当時、冬季北アルプスで露営する技術的研究や装備のテストも十分ではない。ツェルトビバークは、冒険的な試みであっただろう。

記録から考察すれば、極めて厳しい露営となった。なぜなら、強風に対し、ツェルトビバークは相当厳しいものがある。自然に出来た小さなスノーホールに避難し強風を避け、危機を耐え

ている。キレット手前でのビバークがもう一晚続けば、シュラフザック無しでは、耐えられなかっただろう。殊に、ツェルトに工夫して取り付けしたセルロイドの窓が破れ、危うくツェルトが破損し致命傷になるところだった。窓をつけることについては、再考し、テストを求めている。松濤明の北鎌尾根の遭難もしかり、防寒防風衣の飛躍的に改良された現在でも、2007（平成19年）年10月白馬岳の凍死を始め、強風下の北アルプスで凍死遭難が後を絶たない。強烈な冬の季節風に対処することは今もって大きな課題である。

1936年（昭和11年）1月の早稲田大学の鹿島槍ヶ岳北壁の初登攀も登頂終了後に、壮絶な2回のビバークを重ね、命からがらキレット小屋にたどり着いて生還している。この縦走は、冬季登山におけるツェルトビバークの可能性を開いた記録とは言え、奇跡とも言える生還である。

食糧は唐松小屋で使用した米を加えるとおおよそ7kgを超えたと考えられる。一人当たり、約3kgだろう。彼らの解析だと、1人1日2886、6カロリー摂取している。過酷なビバークによる食欲の低下と超過日程による食事制限のため、必要カロリー以下だとしているが、近年の大学山岳部員における、入山中摂取カロリーは1200～1800カロリーである。登山中の消費カロリーは3000～4500カロリーである（文部省登山研修所調査）ことを考えれば、十分とはいえないが、近年の、大学山岳部員の2倍ものカロリーを摂取している。日常生活の摂取カロリーが最近の学生より多く、体力的に優れていたことを示すものではないだろうか。荷物は一人当たり3kgの食糧、ストーブ、燃料、登攀用具（ザイル、クランボン、わかん他）、推定10～20kgだろう、かなり軽量にして行動力の向上をはかったと推測される。

彼らの報告によれば登攀技術的に、困難な課題は無いと考えている。実際約7時間の行動で、キレット手前まで行き、ビバークしているところから考察すれば、順調な行動である。

しかし、唐松岳から牛首の下降、五龍岳のGⅡから山頂までの岩の混じったアイスバーンは、滑落事故のよく発生するところであり、決して易しい所ではない。次いで、五龍岳山頂からの下り、並びにGVの下り、赤抜の通過は、アイスバーンであれば、ザイルを使用したいところである。かなり厳しく、困難な下降と通過である。キレットの通過が最大のポイントのように思われているが、この区間は、後立山縦走の核芯部であり、幸いこの時は、三月末であり、雪も緩み、クランボンに雪が付き歩きにくかった（団子になった）と報告されているから、アイスバーンではなく、滑落の危険も小さかったと思われる。



鹿島槍ヶ岳～八峰キレット～赤抜

### Ⅲ. 雪の鹿島槍ヶ岳、五龍岳からヒマラヤへ

柳澤 昭夫

榎有恒がアイガー東山稜を初登攀したのが1921年（大正10年）。この頃、大学山岳部員は、当時の日本山岳会の人々とは異なった登山方法を模索していた。ママリーイズムといわれるより困難な岩稜、岩壁、冬の登山、いわゆる「アルピニズム的登山」を求めはじめていた。榎の初登攀と榎によって紹介された登攀技術の影響は大きかった。一方では、レルヒによる山岳スキーが紹介され、冬山登山にスキーが使用され始めた。榎さんのアイガー東山稜の初登攀から僅か10年足らずのうちに、夏の穂高、剣岳、北岳の岩稜、岩壁が登られ、早くも積雪期の困難な登山が試みられるようになった。冬の剣岳や穂高岳、北岳、そして後立山の縦走や鹿島槍ヶ岳北壁や荒沢奥壁の登攀を目指す。

この記録は、『立教大学山岳部部報』3号に載った1931年（昭和6年）の記録である。立教大学山岳部の堀田弥一と小原勝郎は、3月19日、宇奈月から黒部川を数十回も渡渉しながら遡り、猫又の日電の取り入れ小屋に入る。翌日は鐘釣温泉に、21日は、不帰谷を詰めて、不帰と百貫山の間、不帰のコルを越え、祖母谷を下って祖母谷温泉の小屋へ泊まる。翌日、祖父谷を渡って南越を登り、奥鐘尾根へ出て餓鬼の田圃に荷物をデポし、祖母谷温泉に戻る。その翌々は、餓鬼の田圃を経て餓鬼谷へ下り、岩小屋に泊まる。この小屋は、岩壁に木を立てかけ、ボロな防水布をかけただけの小屋とはとても言える代物ではなかった。ここで三日間悪天のため停滞した。その後、餓鬼谷から、五龍に続く東谷尾根を越え、五龍岳と鹿島槍ヶ岳を分ける東谷に下り、そこに雪を掘って小屋掛けして



五龍岳

基地とした。そして、東谷と鹿島ウラ沢の間の尾根を登って、鹿島槍ヶ岳へ登頂、翌日は、東谷を詰めて五龍岳に登頂した。宇奈月の猟師2名を雇ったとは言え、堀田弥一と小原勝郎のたった二人で、テントを持たず、野営しながら、3月19日に入山し、4月9日下山にした22日間にわたる山行である。

そのころ、「アルプス・コーカサス登攀記」で名高いママリーのママリーイズムと言われる、より困難な登山を求めるアルピニズムの影響を強く受けて、早くも夏の岩壁登攀から、積雪期

のバリエーション・ルートの登攀を展開するようになってきた。当時の登山の担い手は、旧制の高校、大学の山岳部の学生達である。関西では、甲南高校、浪速高校、三高、京大、神戸商大、同志社大、関大、関西学院等、関東では、早大、慶応、立教、東大、松高、東京商大などの学生山岳部が大活躍をしていた。穂高、剣岳、北岳の、今ではクラシックルートと呼ばれる岩場に初登攀が行われるとともに、冬の岩壁にも果敢な攻撃が行われた。その舞台の中心が冬の鹿島槍ヶ岳である。まだヨーロッパでさえ夏の岩壁に初登攀が行われている頃である。冬の季節風と豪雪、マイナス20度を超える寒気のなかで展開した冬の初登攀である。猟師さえそう入る事のなかった奥深い未知の谷へ入り果敢な登山を行い、実力を着けていった。こうして立教大学（隊長堀田弥一）は、1936年（昭和11年）ヒマラヤのナンダ・コート（6867m）登頂の快挙を成し遂げたのである。もちろん、日本のヒマラヤ初登頂であり、世界の登山史に残る記録である。

## IV. 早春の黒部川側より鹿島槍ヶ岳、五龍岳

堀田 弥一

さて3月（昭和6年）も半ばを過ぎていよいよ黒部入りの日がやってきた。行程は、宇奈月 — 新鐘釣温泉 — 祖母谷小舎 — 東谷（鹿島槍ヶ岳、五龍岳） — 祖母谷小舎 — 新鐘釣温泉 — 中の谷岩小舎（毛勝岳、猫又山） — 内蔵助平 — 剣ヶ御前小舎である。小原と私は黒部電鉄終点宇奈月の一つ手前の音沢で降りて、行を共にする山の部落の人たちを訪ねた。音沢は10数年前までは黒部川最奥の部落であり、下流の愛本橋から数キロ黒部川右岸の山路をたどる。炭焼き等の山仕事をする人たちの中に何人かの猟師たちも育ってきた。片貝谷の奥からこの界限にかけて黒部奥山に住む人たちの中で黒部の主と言われていた人に佐々木助七という猟師がいた。その子である市次郎（当時48歳）と昨年11月祖母谷小舎へ共にした竹次郎の2人が同行することに決まった。

その頃は北陸線三日市駅から宇奈月駅までの電車は単独の会社で、黒部鉄道株式会社と称していた。黒部鉄道の顧問で黒部保勝会を主宰していた吉沢庄作氏が宇奈月の私たちの旅館まで来て何かと世話をやいて下さった。氏は私の中学校入学時の保証人であり、博物の先生であり、かつまた、ずっと以前から立山、黒部に造詣が深く日本山岳会の初期からの会員でもあった。高山植物やほたる鳥賊の解説には情熱をこめて教えられたが、その頃の私はあまり熱心な生徒ではなかった。後日ナンダ・コートから帰って郷里へ行った時、押花にしたヒマラヤのエーデルワイスを差し上げたのだが、よほど嬉しかったのか終生大切にしておられたそうだ。

宇奈月を出発した私たちは、軌道の上を進むことわずかにして川原に下りた。積雪と雪崩のため、トンネルは塞がり、岩壁が進路を阻んだ。雪崩がいつ襲いかかるかわからない山腹を避けたのである。黒部川本流の渡歩を重ねること40回、ようやく日電の猫又取入口にたどり着いたが、途中から激しい雨に襲われ、この先は雪崩の危険地帯もあるので、ここで泊めてもらった。取入口から先は川が満水のため、山裾を通るので雪崩の危険はあったが、翌日は幸いに好天に恵まれ、朝のうちは凍みでいて容易に新鐘釣温泉に着くことができた。快く迎えてくれた番人が、去る1月大変世話になった人と違うので聞いてみると、一カ月ほど前に不帰谷へ猟に入り、雪崩のため命を落した、ということであった。雪の奥山で冬籠りする人たちの宿命を感じ、冥福を祈らずにはおられなかった。

不帰谷は1月に下った時と様相が一変していた。雪崩で谷は一杯に埋まり、両壁から落ちたデブリのため、数十メートルの間隔で山と谷になっており、目の前の山の先は見えなかった。両壁が急峻で高い所は1000メートル以上も落差があり、その夥しい雪の大部分がこの狭い谷に降雪ごとに気温の変化ひとつで落ちてくるので、その状景は独特で、かつ異様なものであった。そこで私たちは、雪が両壁に凍みついている朝のうちに通り抜ける必要があった。1月とは違って雪は固く締まっているので、あまり時間はかからず予定通り通過できた。不帰谷の上半は上に開けた急斜面で重い雪のラッセルに苦しめられながら百貫山と不帰岳の鞍部を越し、祖母谷を縫って小



餓鬼谷の岩小舎（『立教大学山岳部部報』第三号）

舎へ着くのに意外に時間がかかった。祖母谷小舎は夏は人の往来が多い騒々しい所だが、積雪期には誰も近づかない静かな落ち着いた小舎で、直ぐ近くの川原には温泉が湧き出て申し分ない。その上、昨年の秋、食糧と薪を備蓄しておいたので居心地は良い。しかし、ここからは鹿島槍や五龍は遠過ぎて、幾日かのビバークを予定しなければならない。また、進路には餓鬼谷や東谷のように雪崩の多い所を長時間にわたり通らなければならないので、天候によっては動けないこともある。

さて、当時と現在の隔たりを補うために、ここで私たちの装備について若干記しておく。まず、アイゼン、ピッケルはともにスイス製、輪かんじきは猟師たちに頼んでスキー・登山兼用の靴に合せて作ったもの、スキーは長さ1.5メートル、幅は普通のものより広目で、この山行のためのみに特別に作らせたもの（1月の白馬から黒部へ下った経験より）。これらを木立の混んだ急斜面や雪崩のデブリの上、深雪と凍みた固雪などに対し臨機応変に使用したり、担いだりした。野営の道具としては、羽毛のシュラフザックと大きな油紙二枚だけ、鋸は持って行ったがスコップは除外した。ほかに数日分の食糧と防寒具も持たなければならないので、荷物が過重にならないよう、最小限の装備品にとどめたのである。テントは重くて駄目。ツェルトザックは中での行動は不自由だし、それに私たちはまだ使った経験もなかった。雪洞はまだ充分な研究をしていなかったが、雪の中に穴を掘って寝ることは覚悟していたし、持参の品物と地物を利用して、なんとかなる計算をたてていた。その場合最も重要なものの一つは鋸であった。

さて、私たちは天候の回復を待って餓鬼谷に向かったが、今回のために考案した短いスキーが大変役立った。谷から尾根を越して谷に下る行程の中で軟雪でも、木の混んだ急斜面でも輪かんじきだけの人夫より機動的で、かつ敏速に行動することができた。雪崩に気を配ることとデブリの上を歩くことはいつもながらつきものである。餓鬼谷の岩小舎は名ばかりで、大きな岩に5、6本の木が立てかけてあり、その上に古ばけた防水布が1枚かかっていた。おそらく雪の降らない時に使用したもので、猟師たちが入るのも残雪期に限られたものと思う。生木を焚くことは猟師たる人夫たちには容易なことだし、焚火のため滴る水滴を防ぐのに、さっそく油紙が役立った。そしてこの好ましからぬ岩小舎で悪天候のため3日間の滞在を余儀なくされた。雪のない時はいざ知らず、積雪期における人夫たちの経験もこのへんまでで、雪の東谷とその野営地点は、これから自ら探索しなければならない。気温は下がって、やっと天候も落ち着いてきたので、東谷山を絡んで東谷に下ったが、アイゼン、スキー、時には輪かんじきと、雪質と地形に応じて変化に対応した。途中、谷はデブリが多く尾根は木が混んでいてルートの設定は容易だが、雪崩に対する注意はゆるがせにはならない。東谷の野営（標高1300メートル付近）には三つの候補地を見つけた。そのうちの、大きな岩陰と尾根の末端の斜面に穴を掘ることは、次の理由からこれらを見合わせた。すなわち、天候が崩れて動けなくなった場合、降雪量いかによっては雪崩の波及を被るおそれがあるからである。

結局、東谷の一番広がっている広川原の真中で、わずかに水の流れが出ている所を利用することとし、固くなっている雪を鋸で切り、川に流し、三方を雪の壁とした。流れに面した一方を出入口と

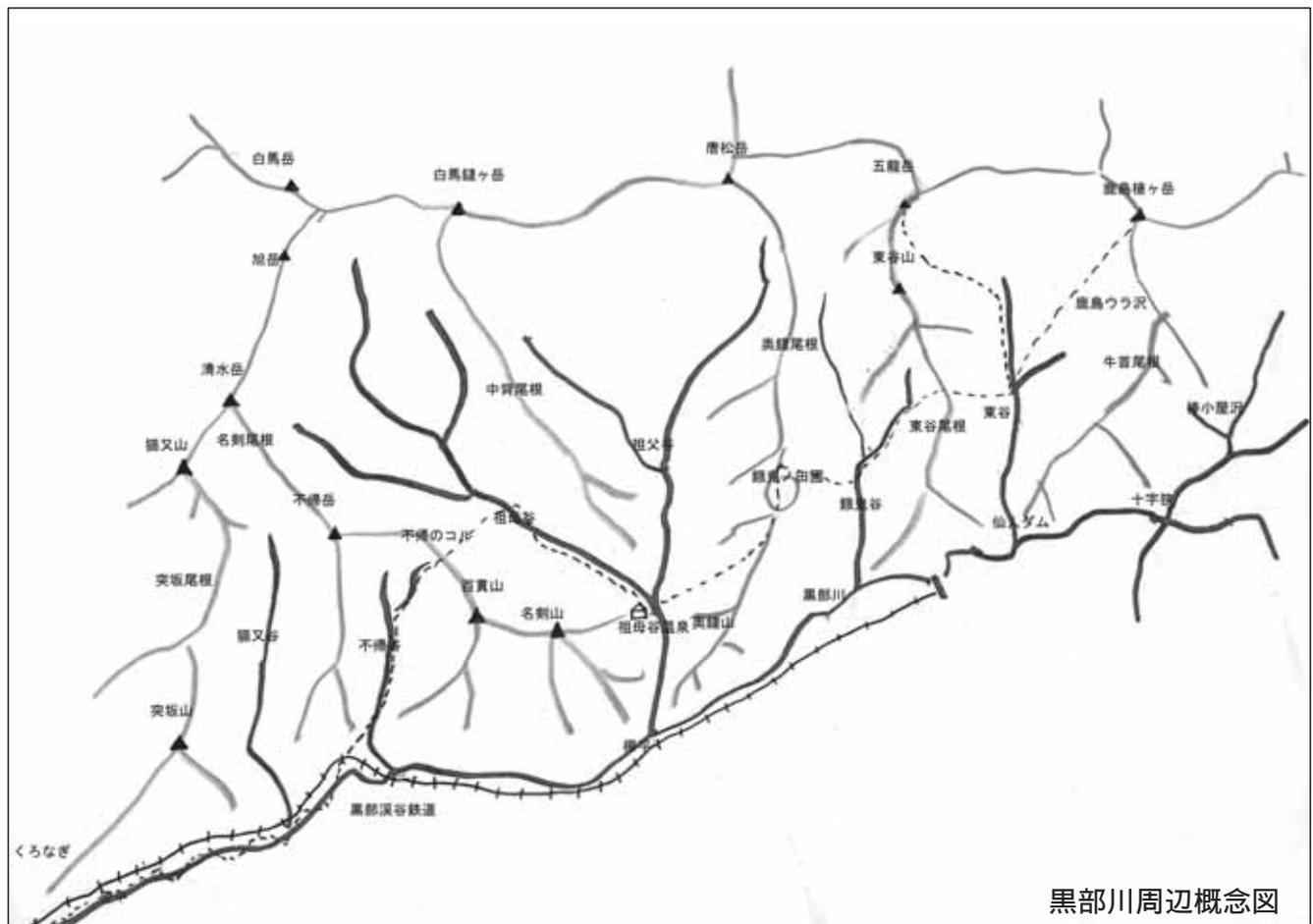


東谷の野営（『立教大学山岳部部報』第三号）

すると同時に、石を積んで薪を焚き、冷たい川風を和らげた。尾根は立木を切って組み、その上に2枚の油紙を拡げて枝をかぶせた。下には葉のついた青木の小枝を敷き、数日間の野営に耐え得るようにした。翌日は幸いに天気恵まれ、鹿島槍の頂上から東谷の二股まで続いている尾根の末端から登りだし、快適な登高を続けて予定よりずっと短い時間で鹿島槍の登頂を終えた。さらに翌日も下り坂ではあったがまああの好天で、五龍岳の登頂も済んだ。五龍岳は東谷を少し登って左側に落ちる滝(ほとんど雪に埋っている)の上へ出てから上は、高度差が1000メートル以上も遮るものもなく続く急斜面で、途中雪質の変化も多かった。雪質では鹿島槍も同様だったが。すでに一週間にもわたる雪中露営と連日の行動にいささか疲労気味の私たちは、やっと思いを果し、ほっとしたのは3月も末日であった。

毛勝、猫又から剣、立山へと続く連山と後立山に囲まれた黒部川の雪に埋もれた内院深く押し入って、随所に見た景観は実に素晴らしいものだ。前を見ても後を振り返っても、雪に蔽われた山々の輝きと陰、そしてその拡がりがある。それは私を山へ引きつける魔法のようなものだ。

しばらく続いた天気も、ようやく崩れる兆候が現われた。疲れてはいるが、ここで休養をとることは得策ではない。雨と雪と吹雪をついて一気に祖母谷小舎まで引きあげた。途中、雪崩には最も気を配った。危険地帯は銘々が全力でがんばり、安全地点で待つようにした。スキーが利用できる小原と私はいつも人夫を待ったが、吹雪で方角が分らなくなる尾根上では、時々人夫たちと相談しなければならなかった。祖母谷小舎は、これまでと比べると天国のようだ。食糧も乾いた薪も有余り、温泉まで湧き出ている。十分に休養をとった後、来た時のルート逆を辿り新鐘釣温泉に戻った。お互いに無事と目的達成を喜び合ったが、ここで人夫たちの不安が爆発した。これから先は絶対について行かないと言うのだ。彼等の先代は猟師として熊や猿、羚羊、貂などを追って秋から初冬へ、あるいは残雪期に黒部奥山深く入り込んだ。熊の胆と猿の頭の黒焼は薬として高価で貴重なものであったし、毛皮は敷物や衣料として珍重され、肉は往来の少ない山奥の人たちにとって、またとない蛋白質の食糧であった。発電所の関係でこの奥山にも人の出入りが多くなり、登山者の関心も高まったのは大正に



黒部川周辺概念図

入ってしばらくしてからである。獮の獲物に代って、日当による山歩きをするようになったのは、その頃からかも知れない。彼等の考え方には限界があった。山という自然の中で、未知の魅力にひかれ、その可能性と喜びを求めようとするわれわれと山を生活の場としてきた彼等との、心の差異は如何ともしがたい。山を背景に行動することと、その魅力を共通点としてお互いに助け合ってきたのも限界にきたのだ。私は芦峯の人夫たちにも、程度の差こそあれ同様なことを感ずるようになっていた。

とにかく、人夫たちの同行なしに小原と私の二人だけで2000メートルの急峻な山稜を越して中の谷の岩小舎に入り、さらにそこから内蔵助平へ向かうには、準備も力も不足である。残念ながら黒部からの内蔵助平入りは中止して芦峯に回り、剣乗越の小舎から内蔵助平へ向かおうと弘法小舎まで行った時、内蔵助平から引き揚げてきた沢本、奥平、小林と宗作、喜一の一行に出会った。

沢本らの話によると、二週間にわたる内蔵助平生活も悪天候と雪中野営の不自由さのために見るべき登山活動は、ほとんどできなかつたということであった。一行は長期間の山籠りのため、下界では遭難説まで噂にのぼったほどで、疲労は隠し得ず少憩ののち下山して行った。ただ、沢本だけが残って、小原と3人で剣岳の頂上に立ったのは4月半ばであった（「早春の黒部川側より鹿島槍ヶ岳および五龍岳」の記録は、207頁参照）。

こうして、黒部川側から積雪期の鹿島槍ヶ岳、五龍岳に登るわれわれの胸中には、すでにヒマラヤへの夢が芽生えていた。「1 ヒマラヤへの願望」で述べたように、この山行の直前の昭和5年11月（1930年）と昭和6年（1931年）2月の日本山岳会の二つの小集会在、ヒマラヤへの願望を大きくかきたてていたのであった。

注、本文は堀田弥一著『ヒマラヤ初登頂』筑摩書房 1986年 P161～P166より転載

## V. 早大山岳部による鹿島槍ヶ岳北壁主稜の初登攀

児玉 茂

早大山岳部による鹿島槍北壁の厳冬期初登攀は、勇壮な登攀として世間ではよく知られていた。それは皮肉なことに正月早々の山岳遭難事故として耳目を集めたためである。若い二人の部員、小西宗明と村田愿によるこの壮挙が明らかになったのは、二人が1月2日の登攀開始から十日後の1月11日の夜に神城の宿に戻ってからのことである。非常な悪天に遭遇してしまい十日間もまったく安否不明の状態に置かれ、大いに衆目を集め続けていた。その故に生還した小西と村田の登攀は、今度は壮挙として改めて大きく取り上げられた。言うまでもないが、この登山は二人だけの企てではなく、早大山岳部の冬山登山の中のアタック隊員としての行いというのが正しい位置づけである。

この登攀が行われた昭和11年（1936年）頃の世界の登山潮流を見てみると、ヒマラヤの高峰への登山が本格的に始まっている。1924年以降途絶えていたエヴェレスト登山が若い世代を加えて再開される一方で、パウアー隊のカンチェンジュンガとナンガパルバットでの活躍、若いスマイスとシプトンによるカメット登頂などは日本人にも大きな刺激を与えていた。学生登山者の間ではヒマラヤ登山の文献研究が盛んになり、高所登山の方法の実験的な実践が富士山で行われ、さらには“遠征”のノウハウを蓄積していった。

早大山岳部の場合は、昭和7年（1932年）から部を挙げて取り組んだ積雪期滝谷登攀が、昭和9年（1934年）春の第五次槍平生活で目標の第四尾根完登を果たし、次なる目標の模索が始められた。例えば滝谷の猛者出牛と五十嵐は、スキーを駆って槍平から双六、薬師を越えて立山温泉まで1日で縦走するというユニークな記録を作った。赤松、田村、石沢ら滝谷第三次隊、第四次隊の若手メンバーは滝谷に代わるディフィカルト・ルートを求めて鹿島槍北壁と剣岳西面に対象を定め、その年の夏に偵察を兼ねた



鹿島槍ヶ岳北壁

登山に出かけた。そして京大が行った富士山での高所露営と同様の実験は、滝谷のエース今井らの協力を得て11月に実施され初めての雪中露営を経験した。

いよいよ実践登山に移すことになるが、当時の早大山岳部は理系の第一早高、文系の第二早高と大学からなる60人の大所帯を抱えており、上級部員から高校の新人までの各レベルに合わせた指導が行われ合宿が組まれていた。この年の冬山合宿は4隊が出て、そのうちの1隊が第一次遠見尾根生活であり、赤松、田村をリーダーに7名が参加した。主目的は遠見尾根での雪中露営と極地法の実践訓練である。鹿島槍北壁の攻略法としてカクネ里にいかに入り込むか、雪崩の危険箇所はどこか、尾根上にキャンプを進めて目標の壁を目指すという滝谷登攀時代から一步を進めた計画になっていた。

年の明けた昭和10年（1935年）3月、いよいよ遠見尾根から鹿島槍北壁を目標とした第二次遠見尾根生活が始まった。遠見尾根隊には田村をリーダーに8名が参加、白岳より主稜線に出て八峰キレット付近よりカクネ里に降り鹿島槍北壁を登る計画を立てた。白岳に第2キャンプを上げ、五龍岳東面の壁を登攀したが、第3キャンプ建設に至らず、計画を変えて白岳から延びる尾根を下った台地上にキャンプを作ってそこからカクネ里に降り、北壁に取り付いた。悪天候の合間をぬい北壁の正

面と右よりのルートを3日間にわたって試みたが冰雪と悪天候に阻まれて断念した。

もう一方の計画、劔岳西面も開始された。劔岳が選ばれたのはアプローチが困難で、極地法で必要な物資の補給路の確保の研究にもなると考えたためである。第一次隊は全体の把握が目的で赤松と石沢が馬場島に入り、赤松は単独で首尾よく小窓尾根の初登攀に成功した。そして未踏の池の谷尾根(劔尾根)を最終的な目標に決めてきた。この年の夏に池の谷尾根の本格的な偵察が行われた。

同じく鹿島槍ヶ岳でも北壁を偵察し、蝶型岩壁の右稜にも登り冬への見通しをつけてきた。

そして12月となり第三次の遠見尾根生活が行われた。参加者は6名、リーダーは大学一年で滝谷メンバーになった灘波で一次隊にも参加した。小西と小林は今回で三回目の参加、尾関は第一次隊に、村田は第二次隊から加わっていた。ちなみに小西と村田はまだ早高の学生である。

北壁攻撃の手筈は、カクネ里から雪渓を登り、中途から左側の雪壁に取り付きスノーコルに達し、そこから頂上より直降するメインリッジ左端に入るルンゼを攀って頂上に突進するもので、まずは灘波と小林が北壁を攻略し、同時に尾関と山田が八峰キレットを偵察して小屋に食料をデポし登頂後の安全を期した。村田と小西が翌日第二回目の攻撃を加え、次いで第三回、第四回とこの壁にあくまでも四つに取り組もうというのである。

12月31日手筈通り灘波パーティーが苦闘の末スノーコルに達して戻ってきた。明日はいよいよ頂上へのアタックである。しかし残念ながら昭和11年(1936年)の正月は猛吹雪で明けた。1月2日午前7時、アンザイレンした小西、村田パーティーは勇んで出発した。前々日に灘波パーティーによってトレースされたスノーコルまでは2時間で着いた。そこから上部の雪壁を懸命に乗り越え乗り越えて気がつくともどりは濃霧に取り囲まれ雪さえも降り出していた。これでは当初考えていたルンゼを辿るというルートは雪崩の危険で通れず、真上にどこまでも続く急峻で不安定な雪を着けた雪壁をひたすら攀じ登る以外になくなった。ガスはますます濃くなり視界はきかなくなった。

頂上も近いと思われるあたりの岩壁をダケカンバを頼りに強引に登り、見覚えのある岩稜に達するとぼんやりと水平の稜線が見えてきた。およそ12時間の苦闘の末に午後7時に頂上に立った。

吹き晒しの猛烈な吹雪の中で直ちに雪穴を掘ってビバーク。翌3日はガスは深い吹雪の狂奔は少し収まり、午前8時半に行動を開始した。しかし時に激しい烈風に顔も上げられず、ようやくたどり着いたキレットの上部の不安定な斜面で二日目のビバークとなってしまった。1月4日の朝、準備中に村田のアイゼンの片方を谷に落としてしまう。昨日スリップした雪の降り積もった斜面を時間をかけて登りなおし、コブを一つ超えた時、ついにキレット小屋が見え二人は狂喜して駆け下りた。九死に一生を得た心地がして扉を開くと、なんと小屋には先客がいた。

後立山を縦走中の明治大学隊と慶応医学部隊であった。疲労の極にあった二人は彼らから手厚い手当てを受けている。しかし天候の方は一向に回復の兆しを見せず、ここにさらに六日間の籠城を余儀なくされ、縦走隊の食料もデポされた食料も尽きかけた1月11日未明、今までの烈風も静まり、月光に照らし出された山々の連なりが見えだした。午前6時に小屋を出てキレットからカクネ里に下り、白沢の出会いで焦燥の極に達した仲間たちに迎えられた。

冒頭に記した通り、この登攀は当時の世間によく知られたものであったが、不思議なことに早稲田大学山岳部では公式の記録として報告されることがなく、厳冬期鹿島槍ヶ岳北壁初登攀と劔岳池の谷尾根初登攀を含む昭和10年冬、11年春の登山シーズンに成された輝かしい成果が葬り去られた格好になっている。後輩の山崎安治氏は当事者に話を聞き、日記を読んでこの二つの記録を蘇らせたことで、かろうじて山岳部の記録として伝えられた。なぜこのようなことになってしまったのかは早大山岳部の特異な内部事情によるのだが、先にも記したヒマラヤ登山が大きな影を落としていたことは間違いない。この年昭和11年(1936)には、立教大学隊が日本で最初のヒマラヤ遠征に出立し見事にナンダコットの頂上に立っている。(稲門山岳会)

## VI. 昭和初期の登山技術

### 鹿島槍ヶ岳北壁・荒沢北稜・荒沢南稜冬季初登攀と当時の技術資料 —水野祥太郎、「岩登り術」とG. W. Young, 「Mountain Craft」—

松本 憲親

#### 1. はじめに

わが国のアルピニズムが欧州のアルピニズムを模倣して発展するのは1921年（大正10年）、槇有恒がアイガー東山稜を初登攀したことが皮切りとなった。当時ほとんどの山が冬季に踏破されていたので、アルピニストの主目標はヴァリエーション・ルートの初登攀となるのは自然な流れで、程なく冬季登攀が主目標となって行った。鹿島槍ヶ岳北壁、荒沢北稜、荒沢南稜等のビッグルートを含む後立山連峰の登攀ルートが、「より困難を求めて」の合言葉のごとく、初期の冬季ヴァリエーションルート登攀の対象となったのであった（下表参照）。登攀の立役者たちは、学生山岳部員たちであったが、彼らに影響を多く与えたのは、G.W.Youngの「Mountain Craft」（1920年・大正9年）であり、水野祥太郎の「岩登り術」（1933年・昭和8年）であった。本稿では前者の後者に与えた影響を探るものである。

西暦月日	登攀ルート	メンバー（所属）
1931. 3. 31	白馬岳主稜	田中、丸山、秋山（神戸商大）
1932. 1. 5	穂高・コブ尾根 - ジャンダルム	田名部、小川（東北大）
1935. 3. 21	鹿島槍ヶ岳北壁右ルンゼ	今西、中村（浪高）
1936. 1. 2	鹿島槍ヶ岳北壁主稜	小西、村田（早大）
1937. 2. 28	鹿島槍ヶ岳荒沢北稜	小谷部、森川（東京商大）
1937. 3. 23	白馬鑓ヶ岳北稜	喜田、武田（甲南高）
1941. 3. 26	鹿島槍ヶ岳荒沢南稜	佐谷、伊藤（東大）

#### 2. 「岩登り術」の内容と「マウンテン・クラフト」の内容の対比

水野祥太郎著「岩登り術」（1933年）は阪神地方を中心とした山岳会RCCの仲間・藤木九三著「岩登り術」（1925年・大正14年）を下敷きに書かれた物だが、ヤングの「マウンテン・クラフト」を参考として、冰雪技術にまで記述が及び、当時の冬季初登攀を標榜する気鋭の山岳部員たちの数少ない指導書の一つだったとおもわれる。



「Mountain Craft」 G.W.Young著



「山登り術」水野祥太郎著

## 第1章 岩登りの本質（1－5頁）

内容的にはまず、岩登りの本質について述べられているが、山登りの本質と岩登りの本質が相容れないものであるとする説を退け、相容れるものであるとし、岩登りを交えての山登りがより深い登山の味わいを得るものであるとしている。この点とはかなりかけ離れるが、「マウンテン・クラフト」第2版（1921年・大正10年）の序文でヤングは、登山者のみならず、歩くことの好きな人、読むこと、それらについて考えることを好む人に向けて書かれていると述べているが、ここで言う登山者は氷河を越えて岩と雪の領域に進む者を意味し、歩きを好むとは氷河を起えないハイキングを指している。なお、以下の「マウンテン・クラフト」の引用は全て同第2版からである。

続いてヤングは、登山は実践で学ぶものであって、自身は登山教科書に大きな価値を置いていないと言い、彼の若い頃のヒーローが冒険談から搾り出した原則を編集したものを、かつて楽しみのために読んだが、今は山岳雑誌に載る事故物のフィクションとともに読まなくなっていると書いている。一方中国語を習い、山岳アドヴェンチャー記録の理解に役立てようという姿勢を示している。人に読書を薦めないのは、書物からの知識が登山の芸術性を損なうからだとしている。この点が「岩登り術」で言うところの「深い味わい」に通ずるところだろうか。しかし、ヤングはこの後に、書物の主張するところには一定の価値を認めている。最上級のクライマーにも、彼らに関らないがゆえに、本書に述べる安全策が欠けていると言い、全ての正しい登山動作の基礎を成し、50年間の実際的登山に変わらず明らかになっている原理が彼らのために、役立つと宣言している。

## 第2章 岩登りの発達史（6－30頁）

この章では登山の歴史を詳しく述べている。

### I. 欧州の登山史

古代から交易と戦争のために峠が越えられていたのだが、本格的な登山の始まりは欧州最高峰モンブランの登頂（パッカール、バルマ；1786年・天明6年）であり、1865年（慶応1年）のマッターホルン登頂（ウインパー等）を持ってアルプスの黄金時代としている。この間の登頂者たちは主に英国人で、彼らのスポーツ的登山観が際立っている。

1860年代後半にはガイドレス登山の隆盛を見るが、「スポーツ主義」は1880年代に広まった。「困難」が人を山に呼び寄せる状況となった。「マウンテン・クラフト」でヤングはガイドつきとガイドなしの登山について多くのページを割いている（101－137頁）。

このころから独、英の町の近郊の岩山に「岩の道場」「岩の庭園」といわれる岩登りの練習場が出現し、登攀技術が高度に進歩する。

アルパイン・クラブに装備に関する委員会が1864年（元治1年）に設けられ、今日的なピッケルとザイルの規格が定まった。クランボン（シュタイクアイゼン）もこの時代から使われだしたが、悪魔の爪と呼ばれ、その使用を嫌悪する風潮が長く残ったと述べている。スカルベッティー（麻底靴）が出現。

登攀技術は当初腕力に頼るもので、足の使い方は重視されなかった。ヤングが「マウンテン・クラフト」でこれをクリング・エポック（掴み時代）と呼んだと指摘しているが、エポック・オブ・グリップ・クライミングと思われる（ちなみに、ヤングは後のページで腕力に頼るクライマーを「グリップ・クライマー」と呼んでいるし、水野も後にグリップクライマーの語を使っている）。

次いで砂岩地方の岩溝内登攀が盛んに行われるに到り、この時代をガリー・エポックと呼ぶと記しているが、「マウンテン・クラフト」によると、登山はまず、氷雪登攀から始まるので、これをウォーキング・エポックと呼んでおり、次に内面登攀が始まるので、これをガリー・エポックと呼び、その次にワイド・アングル・コーナーやスラブが登られるようになる。この当初は手に頼る登攀で、足をなおざりしたので、上記のエポック・オブ・グリップ・クライミングと呼ぶとヤングは

記している。そして、スラブ・クライミングにおいては手と目が補助で、足で立てることが再発見されてバランス・クライミングの時代に続くとした。

水野の記述に戻ると、最後に現代のバランス・クライミングの時代に移るが、砂岩地方や石灰岩地方ではなお摩擦が重んじられていたとしている。

19世紀末葉の登山界は冬期登山が注目され始め、20世紀初頭には海外遠征熱がさかんとなった。

登山界の近況の項では、スポーツ主義の隆盛に伴ない単独行の隆盛が起きたのは登山の個性化の表れで、文化教養としての登山の標榜と重なっている。現実主義者は登山と職業の関係において相反する2つの形態を取った。その一つは登山と職業を深く関連付けるもので、他方は全く別に、生活の余技としての登山とするものである。

岩の技術はハーケン技術の発達と訓練で「人力の極致」に達するといわれ、氷の技術はシュタイクアイゼン技術と、氷壁技術の発展で人類能力の極限に達したといわれた。1931年（昭和6年）にマッターホルン北壁がシュミット兄弟によって登られ、前後して西壁、南壁、東壁が登られた。海外遠征は1次大戦後に再び盛んになり、アルピニズムはヒマラヤイズムとなる様相である。

## II. 本邦に於ける岩登りの発達（26－30頁）

本邦の岩登りは鹿子木員信の影響を受けた慶応山岳部が最初で、1919年（大正8年）以前から活動している。1921年（大正10年）慶応の先輩榎有恒がアイガー東山稜を初登攀したのが本邦アルピニズムの隆盛を見るきっかけとなった。1924年（大正13年）には穂高の峰々が春季に登頂されている。このころ早稲田の船田三郎はスポーツ主義を掲げて慶応 - 学習院のガイドィッド派に対抗し、関西では阪神登山界にRCCが誕生した。RCCでは当初摩擦登攀が主であったが、練習場のスケール、質の向上と相俟ってバランス登りの道がとられ始める。1922－1925年にかけてアルピニズムの急速な発展が見られ、槍・穂高、剣を中心に注目する登攀が行われたが、その中であって三高の先輩、西堀・今西・高橋らがヤングの「マウンテン・クラフト」を最高の教科書として登攀を実践したのに特に注目している。学生アルピニズムはこの後冬季登山に向かう。

### 第3章 岩登りの慣習律

この章は岩登りの規範について述べられているが、岩を刻むこと、投げ縄の使用、裸足での登攀等が禁止事項だと書き出している。

#### I. 隊員に関する慣行の項では、

- A. 隊員といえど他人の助力を仰がないこととされるが、協力関係をよしとする考えも少なからずあると述べている。
- B. 編隊の原則として、隊員はフェアプレイの精神による献身を旨とする。
- C. ザイル隊員数は、2－4人が推奨されている。
- D. 案内者（ガイド）を交えることの可否では、明確に否と記していて、その理由は（当時の）ガイドの登山技術の低さ、教養・フェアプレイ精神の低さを挙げている。この点では「マウンテン・クラフト」では、ガイドの技術水準とクライマーのそれに関して詳しく述べており、ガイドの効用を広く認めている。この点は現代のガイドとお客の関係にそっくり当てはまる。
- E. リーダーと隊員では、リーダーが隊中で最優秀の岩登り家であること、判断力と意思に優れた性質があることを挙げる以外に、リーダー盲従とそれを強制することへの疑問を述べ、よきリーダーシップが、よきメンバーシップなしにはありえないことを述べている。「マウンテン・クラフト」の冒頭にリーダーシップ論があるが、一致する内容となっている。

## II. ザイルに関する慣行では、

- F. アンザイレン（ザイルで結び合うこと）可否論では、ザイルによって助かる場合と、一方の墜落が他方に及ぶ危険性の考慮を経て、悪場においては一義的にアンザイレンが認められ、相互協力が必要とされている点を指摘している。しかし、中程度の難度の岩場におけるアンザイレンの可否については意見が対立するが、豊かな人間性による回答が可能だとしている。
- G. 隊員の順序では、熟達者が重要な位置を占めることが慣行されているとしている。
- H. アンザイレンの役目では、フェアプレイの精神から、先登者が後続者を引きずり挙げるのが厳禁されているとしている。
- I. 確保の意義とその適用では、とくに中間支点の適切な設置について述べている。
- J. 特殊なザイル技術では、投げ縄の可否について述べているが、他に道が無ければ止むを得ないとしている。

## III. 用具とその使用に関する慣行では、

- K. 履物については、履物が何でも可なのではなく、ゴム底足袋の使用は大多数の登山家から好意を持って迎えられない、風化した岩場をクランボン（シュタイクアイゼン）で登ることの禁止などはぼんやりしたもので、変化すると記している。この点、「マウンテン・クラフト」ではゴム底靴を蔑視していない。
- L. ハムマーの使用では、岩を削ってホールドを作ることの戒めを述べている。
- M. ピトンの使用では、当初ピトンを足場代わりにすることが厳禁されていたが、身体を託するとき使用法が認められるように変わっていると記している。

## 第4章 平衡の理論

岩から落ちないのはバランスが保たれているためで、身体の岩への接触、姿勢の調和、精神的肉体的平衡能力、用具類の適応の協同によるものとし、各項目を解説している。

- I. ホールドとバランスでは、身体、用具の摩擦より滑落力が大きいときに滑落するとし、支持面に直角に働く力の重視を強調している。なるべくそっと触り、そっと用いる心得ならば多くの場合正しい力の方向が得られる一としている。「マウンテン・クラフト」では、「鋏靴を履いているとして、力と体重が一致するに等しい軽さで」一となっている。他の箇所では、「全てのクライミングで足は軽く置き、脚の振りは制御しなければならない。」としているのにほぼ一致している。身体全体を摩擦に用いる場合は少ないとしながら、突っ張るホールド又は抱くホールドは時に驚く程自由な行動を身体に許す一としているが、「マウンテン・クラフト」の、プッシュ・アンド・プレス・ホールドの項に「プッシュとプレス・ホールドが、あらゆるクリング・ホールドより強力で、連続的に上方へ進むために人をしてよりよく適合させることをまもなく発見する。」とあるのが前段に合致する。後段の抱くホールドの記述は見当たらないが、リブ・ライディング（稜に馬乗りになる）の項で、身体摩擦を使う記述がある。脚や足で稜を挟む一方、両腕で稜に抱きつく方法をRCCの人々が考えついたのであろう。体重の配分や三点支持の注意が記されている。

## II. 個人の平衡能力

### A. 心理的平衡能力

平衡機能が無意識的なものである点を説明し、岩登りへの関与の示唆から始まる。

- a. 平衡に関する心理的な馴れの本態では、平衡の破綻が視覚に関与しているとし、岩場での馴れは訓練による、視覚に対する小脳の反応が正しくなることを意味し、それまでは大脳の機

能によるバランスの調整がおこなわれなければならないと説いている。

- b. 意識による平衡機能の補正では、負傷・疲労・睡眠不足等のある場合は、意識による平衡機能の補正が必要だとしている。

#### B. 肉体的平衡能力

- c. 神経筋肉系統と感覚器では、A, Bで述べた小脳・大脳の機能をより正確に説明し、大脳による平衡機能調整の重要性を述べ、感覚器と伝達経路の機能不全に対する注意を述べている。
- d. 平衡に及ぼす局所的な肉体的影響では、手足の負傷等の場合も意識的な補正が必要となるとしている。

### 第5章 岩の予備知識

- I. 削剥作用では、山の高い部分での風化作用によるゴウロの生成と、谷での水蝕を説明している。
- II. 岩の生成では、火成岩・水成岩・変成岩のそれぞれの例を説明している。  
火成岩は、噴出岩たる石英粗面岩・安山岩・玄武岩等と深成岩たる花崗岩等、半深成岩の斑岩類を含む。  
水成岩は、石灰岩・白雲石・粘板岩・砂岩・礫岩・集塊岩等をふくむ。  
変成岩は、結晶片岩類その他を含むとしている。
- III. 岩石の性質と形態の関係では、岩場の形状—コースの選択が岩場を構成する岩石の種類と深い関係にあり、火成岩—塊状、水成岩—層状、変成岩—片状の組み合わせだとしている。
- IV. 岩の形状では、バットレス・フランケ・クリフ・テラス・レッジ・バンド・ライステ（細いバンド）・フェイス・スラブ・クラック（リス）・チムニー・ガリー・ルンゼ・リンネ・峰（ピーク）・割れ谷（ゴージ）・クーロアール・尾根（リッジ）・ジャンダルム・歯（ピナクル）・切れ戸（ギャップ）・タルミ（窓、コル）・アレート（細い尾根）・刃（ナイフエッジ）・肋稜（スパー）、カンテ（エッジ）等を説明している。
- V. 脆い岩場と落石では、脆い岩の定義に2種あり、狭義には剥脱し易い岩を指し、硬い岩が碎石を載せている場合は広義の脆い岩としている。ともに落石の供給源で、夏・秋に多く、太陽熱や上昇した気温、雨中・雨後に多いとしている。
- VI. ガレに就いてでは、岩壁下のガレに植物が生えない時は上方に剥落し易い岩場の存在を示している。  
附、氷雪の形態では、わが国の夏の雪をフィルン（ネヴェ）と呼び、クレヴァス・ベルグシュレント・縁割れ（ラントクルフト・シュメルツクルフト）の違いを示している。

### 第6章 岩登り術の原則

この章では正しい原則を示すことを宣言している。

#### I. コースとホールド

- A. コースの予定では、熟達者は岩場を詳細に観察してコースを組み立てることが出来るとし、第1の目の付け所は岩場の傾斜と岩の性質。2番目は棚・裂け目・稜およびガリー・草木・流水・雪に注目してそれらを暗記し、レッジ、バンド、稜、壁を適切に組み合わせてコースを予定するが、草木・流水溝・雪を選んで登ることは逃避的行為だと戒めている。
- B. コースの採り方では、進むに従い判断すべきことが多いのだが、いくつかの原則がある。直上が出来ない時はトラヴァースして新たな直上コースを探す。常に目を働かせる。「暗誦法」が紹介されている。少し登っては降りて休み、次に登る時はその距離を伸ばしてから降りて休み—を繰り返して登りきる。今日のヨーヨースタイルである。
- C. ホールドのヒントでは、フットホールドの使い方を記しており、外エッジでのフットイングで

は、足首を幾分谷側に曲げるのが良いとしている。拇指球を使うことも記している。また、内エッジの優位性から蟹股での登りを良しとしている。大きなホールドに目を奪われず、バランスを重視してホールドを選ぶ。原則として膝を用いないが、クラックやチムニーでは有利に用いられる。手のホールドを種々示して、プレスホールドとプッシュホールドも示している。肘をハング越えやクラックで使うことにも触れている。

## II. 個人動作の基調

「動作の連続性とリズムを失うな」では、四肢が伸びきらないようにと注意している。

「自じを失うな」と恐怖心の克服を言っている。

「足はできるだけ高く」「手をなるべく下に」「動作は全て静かに」と記している。

摩擦登りと平衡登りは使い分けが重要と記し、筋力の重要性も指摘している。

## III. 編隊行動の基礎知識

A. 人数—2人か3人で2人が最も良い—としている。慣習律の項では2—4人としていた。「マウンテン・クラフト」でも、ガイドを除いて2—4人としている。

B. 順序—熟達者が重要な位置を占めるのだが、新人2人を含む4人なら、登りは熟達者が1、3番目で下りとトラヴァースは1、4番目に位置するとしている。

「マウンテン・クラフト」ではこの場合同じく新人2人を並ばせてはいけないと記している。

C. 間隔—10—35mとしている。「マウンテン・クラフト」では、3人パーティーで30—36mのロープを使用すると記している。

D. 編隊行動の原則—岩登りの編隊行動は「一人は動き一人は静止し一人は眺めて各人別々の不連続の動作をしているかにも見えても、熟達者同士の隊は立派に隊全体としての動きを持っている。恰も蛇の運動の部分部分を高速度撮影した際、夫々バラバラに動いているかにも見えるに拘わらず、蛇全体としては一つの立派な律動的動作をやっているように。」なければならないとしている。この部分は、「マウンテン・クラフト」の第5章CLIMBING IN COMBINATION冒頭の文「素人目には、隊の全員が違うことをしている—ある者はじっとし、ある者は向かわせ、ある者は登っている—と見えるかもしれない。熟練者のみが夫々のクライマーの別々の動作を通じて、ロープの一端から他端に伝わる動作の連続性を発見できるのだ。蛇の前進のごとく、高速度撮影映画に見るように、曲がりくねった連結が、夫々の明白に停止している相に於いて、その先に立つ相とそれに追従する相への連絡を読むことが出来る目にはっきり見えることに過ぎない。」の部分を書き直したように見える。

水野はつづいて、他の隊員に向かって助力を与えることの重要性。会話は簡単明瞭で、不安の色を出さぬ注意が必要。隊行動への集中力。肩車等による補助。連続登攀時の注意は弱者或は悪場にある者のリズムに合わせること。ピッチ毎の休憩をなくし常にリズムカルに前進する。各隊員はよき勇気と実力の保持を。他を元気付ける能力。不断の緊張と忍耐。速やかな判断と確実性。等々について述べている。

## 第7章 ザイル技術とハーケン技術

### I. ザイルの結び方

一体に結ぶ方法として螺旋縷いザイルによるブーリン結びを記し、次いで他の多種の結びを記している。「マウンテン・クラフト」には、ブーリン結びのみが記されている。

## II. 連続登攀時のザイル

連続登攀時の隊形について述べ、各隊員は常に自分の前方にあるザイルに注意を払うことを第1の注意としている。

第2の注意は、隊員間のザイルが岩や木に喰われないようにすることで、

第3の注意は、墜落の危険に対処することで、意識的に岩角にザイルを掛けたり外したりすることも必要と記している。

第4の注意はこれ等の動作が意識せずにルーピングで自動的に行えるまでの訓練の必要性を説いている。

第5の注意は危険を感じたときは肩で確保すべきことを記している。

つづいて、弱者への配慮でリズムが中断するのをザイル操作で防ぐ方法を述べている。

## III. 隔時登攀時のザイル用法（確保の方法）

### 1. 確保の基本動作

A. 手を以ってする確保は、「肩がらみ」を用いるべきとしている。

B. 「肩がらみ」のやり方を記述。出る側のザイルを前腕に1回巻いて握る方法も記されている。座り込んだ形を否定している。「逆肩がらみ」の危険性を指摘。

C. 腰がらみの確保では、ヤングが腰がらみを推奨しているのを批判している。ビレイ（中間支点）との併用で、腰がらみを使用すると記している。

D. 膝がらみ（座り込んで片ひざを立ててザイルをかけるもの）と大腿がらみ—チムニー内でのバック・アンド・フットでザイルを大腿に掛けて行うものを記している。

### 2. 確保の補助動作

A. 確保者自身の確保（アンカー）では岩角、樹木、ハーケン等を用いるとしている。中間支点（ビレイ）がある場合は、アンカーを作らないとしている。

B. 動作者に対する確保の補助手段（ビレイ）では、ヤングがこれを直接ビレイと間接ビレイに分け、前者にザイル切断の恐れがあるとしているのを、当て物をする事で上手く行く事を記している。

ヤングは「マウンテン・クラフト」の第5章、220頁で（With Belaysの項）ザイルが切断すると述べている。また、第6章CORRECTIVE METHODの262頁（セカンドの動作）では「彼の補正動作は、腕、手あるいは体でロープに、ばね効果を与えることが彼に出来ることの全てであると経験的に限定されている」と述べている。しかし水野らRCCでは「マウンテン・クラフト」を参考に、技術を発展させていると見ることが出来る。ただし、第89図に示された確保の方法は、手を負傷する確立の高いものだ。

C. 先頭が動作中に行うべき自己確保（セルフ・ビレイイング）では、先頭が登攀中に適宜岩角や木にザイルを懸ける（前出の「中間支点」この語は現在も通用する山岳用語。）べきことを述べ、ザイルを噛む岩角を避けるべきことを述べている。また、クラックの登攀においてジャムド・ストウンの後にザイルを通すことを述べている。また、先頭が高く登っていくほど直接ビレイの危険が伏在すると述べている。これ等の記述はまた、「マウンテン・クラフト」220—221頁にのべられている。

水野はさらに、ハーケンを7m以内に打ってカラビナを架けるビレイを記している。

D. 後尾の下降に際する自己確保ではC. と同様の方法の他、ザイルにぶら下がる方法を記しているが、この方法は日没等の急ぐ時に限られ、スポーツ精神は一步一步のクライミングダウンを楽しむと記している。「マウンテン・クラフト」には、ロープはスリップした時の為に使用するのであって、懸垂下降は急ぐ時や登った経験の無いところで使用されるとしている。第4章ROCK CLIMBING、クライミング・ダウン節、The Doubled

R o p e 項 ( 1 9 2 頁 ) には、「ロープを固定しないでは降りられないと分かったところへ登ってはいけないことが、堅固な一般則だ。」「今や良き岩登り人は、クライム・ダウンを含めて登らねば完璧といえないので、固定ロープの機会は稀であるべきだ。」としていることが、水野らのこの時代に強く反映されているようだ。

#### IV. ザイル送り

- A. 先行者に対するザイル送りでは、噛まれることおよび衝撃を避けて、軽いルーピンを使うことを記している。
- B. 後続者のザイルの手繰り込みでは、下からの要求が無い限り、ザイルを後続の引きあげに用いてはならないとしている。  
「マウンテン・クラフト」第5章CLIMBING COMBINATION、248頁に、「登攀中の男のロープの取り込みでは、ロープが丁度張っているのを保つことに心し、彼が要求しない限り、緊張や引くことをしてはいけない。」としたのを反映しているようだ。
- C. 最後尾の下降と中間ザイルでは、記述が理解不能だが、ザイルを緩めながらとあり、見えない場所では連絡を取り合っ…とあるから、先行者からザイルを送られながら懸垂するものと思われるが、ザイルが滑る支点の使用が前提だろう。

#### V. 懸垂

- A. ザイルの懸け方、B. 種々の懸垂法、C. 終了後の縄の始末、D. 懸垂時の確保が詳しく述べられ、デュルファー式の変形である大木式が一般化していると述べているが、「マウンテン・クラフト」には、「サイ・ブレイク」(片側大腿にザイルを巻きつける方法)が一般的だとある。大木式は現在も日本の指導員教程に収載されているものと思われる。

#### VI. ハーケン技術

ハーケンの適当な利用は近代岩登り術の精髓とも言えるとしているが、「マウンテン・クラフト」では、その使用を非常に抑制的に記している。ちなみに、200頁には、「我々の丘で見られるタッタ2本のペグを見出すことができるが、それらは二人の外国人によって残されたもので、不要なものだった。」「日没や凍結で下降が困難となる場合にペグをハンマーで打ち込み、アンカーにすることは失敗に対する処置で、携行が誤りで、日の長さに登攀を合わせ、天候に注意することが必要だったのだ。」云々と続くのだが、ピトンそのものもその使用法も記述がない。「岩登り術」の記述の限りでは、これ等の用具の使用はより困難な登攀を可能にするもので、そのような登攀を推奨している感があるが、前穂北尾根四峰北条・新村ルートの初登攀で、はい松テラスからの垂壁にもハーケンが打たれなかったと言いつづられている。このことが象徴するように、英国流の岩登りが日本の登山界に深く影響していることが推察される。

1. 三つ道具の運搬、2. ハーケンの打ち込みに就いて、3. カラビナとハンマーに就いて、では積極的な使用法が認められるようになった経緯を含めて詳述されているが、今日的人工登攀の初級グレードを覆う内容である。これはわが国においても困難な登攀が盛んになることの技術的な裏打ちと見ることができる。

#### VII. 特殊なザイル用法

- 1. てすり確保(臨時の固定綱)、2. 固定綱の登降、3. 投げ縄、錨、4. 荷物の上げ下ろし、5. プルージック結びについて述べられている。3. は禁止を主張している。他の項目は全て今日に通用する技術で、早くから実用されていたことに認識を新たにした。

## 第8章 特殊な岩場に対する技術

ここでは第6章に記した、適合の原則を具体的・特殊的に表している。

### I. 岩場の特殊形態に対する技術適応

#### 1. 横断の技術

棚の横断では碎石、草付きに注意。踏み出す足の選択。踏み替え。横振り（スィング）。匍匐前進。手のみの通過（ハンド・トラヴァース）等の記述。

#### 2. 一枚岩の技術

ホールドが小さく且少ない一枚岩ではバランスがデリケート。手足の4点で立つ。

#### 3. 裂け目の技術

岩の裂け目（クラック）の登攀は四肢の一部を入れてこじつけるようにしてホールドに用いる。大クラックには入り込んではいられないなど、その他も詳しく記述。

#### 4. チムニーの技術

「背と足」（バックアンドフット）、「背と膝」（バックアンドニー）、チョックストウンの処理などを詳述している。

#### 5. ガリーの技術

ガリー（リンネ）はチムニーを大きくした形で、落石に注意。

#### 6. クーロアールの技術

クーロアールは広いリンネで、落石注意。

#### 7. 凹角の技術

本を開いた形の岩。ツツパリが使えることが多い。

#### 8. 壁の技術

壁（フェイス）はスラブより複雑な構造。バランスクライミングの世界。

#### 9. 稜の技術

落石の危険が少ない。載っている碎石に注意。

#### 10. オーヴァーハングの登攀

肩車から手で押し上げる方法が使える。

### II. 岩質に対する技術の適応

#### 1. 脆い岩に対して

風化又は岩層の相違から脆くなっていて、嫌悪なしに登れることは少ない。岩は一方向の力だけに耐える場合が多く、グリップクライマーがこれを登ると岩を崩して進むことが出来ない。彼が一方向に押せばよいことを理解して、「良く注意していても最後に力を移す瞬間に以前の癖を出し易く、したがってこの瞬間が最も危険なものである。」とあるところは、「マウンテン・クラフト」第4章ROCKC L I M B I N G、アンサウンドロック節、175頁の記述—「テストで彼は彼が如何にそれらを使うべきか知るかもしれないが、体を挙げるか或は下げるかの動きが始まる瞬間に彼の機序の癖が自身で再主張し、彼の体がそのホールドに近づくか通り過ぎる時に彼は引く方向を変えるだろう。例え彼がその瞬間意識的に方向を維持しても、彼の体は…」に相当する。水野は続けて、フットワークはより難しく、特に下りは難しいと述べている。この部分もまた、「マウンテン・クラフト」を下敷きに行っているようだ。

#### 2. 碎石の乗った岩に対して

不安定な岩に乗る注意は前項と同じだがこの項で扱う岩の中には根付きの岩が表に出ていることで、識別が重要だと述べている。

### 3. 風化した花崗岩

鋏靴で摩滅するもので、ぐらつく岩塔や岩コブがある。それらはソット押さえる使い方が必要だ。

### 4. 片岩類

風化花崗岩のさらに風化の進んだものに似た岩質で、押さえて登る注意は更に強く要求される。

### 5. 石灰岩の技術

石灰岩はハーケン時術の発展を見た地域の主要な岩質で、チムニー登りも発展した。

### 6. 砂岩

独、ザクセン州の砂岩がチムニークラックの技術発展の中心となった。軟らかい岩質ということで、リングハーケンがセメントを使って埋め込まれていると述べている。

### 7. 石英

欠け易いので、靴は軟底が適している。

### 8. 白亜

軟らかいのでクランボンとピッケルの冰雪技術訓練に適するという。

### 9. 大理石

滑り易いのでむしろ危険といわれている。

### 10. 溶岩

割れ易い。

### 11. 角礫凝灰岩

かん入された礫が主なホールドで、これが抜け落ち易いので要注意。全体に脆い。

### 12. 安山岩

柱状節理が発達している。クラックを利用して登る。

## Ⅲ. 特殊な地形、地物に対する適応

### 1. 海岸の断崖

ヤングが推奨して、ゴム底靴か、毛を外に出した毛皮の靴下を推奨していると記している。

「マウンテン・クラフト」181頁に、その魅力が記されている。いわく「魅惑的なラインが岬や島や波蝕岩塔の多様な岩にある。思わしげな形で出現し、考え込み、驚き、陽気あるいは挑戦的だ。」

### 2. 沢筋の岩場

沢筋の岩場は滑らかで、わらじが良い。滝は高巻くことが多い。

### 3. 草付き

靴の角付けと鉛直に立つ足運びが良いと述べ、クランボンも有効、ピッケルが補助に使えたと述べている。

### 4. 這松

堅固な根を持ち、良い手がかりとなる。自己確保の場合は根元を利用するとある。

## 第9章 諸種条件に対する技術の適応

### I. 天候に対する適応

#### A. 雨に対する適応

雨は岩登りの強敵で、落石を起こすことが特に危険。速やかに安全な逃路を選ぶことを要する。

#### B. 霧に対する適応

登攀への影響が大きい。岩の濡れ、寒冷、ルートの誤まり等に十分な注意が必要。

#### C. 雷に対する適応

頂稜を避ける、逃げられない場合は覚悟して構えて待つのが良いと述べている。

#### D. 風に対する適応

バランスを崩すことと寒冷に注意することとある。

#### E. 夜に対する適応

良い泊まり場の選択が第1で、夜間行動はヘッドランプの利用が良く、月明かりでの行動は手足の感覚が重要。

## II. 季節に対する適応（冰雪の技術）

岩登りを好むものが氷を登るようになるのは歴史が示す自然なものとしている。

### A. 冰雪に覆われた岩場の適応

問題の1は寒気が行動を困難にする、2はバランスの困難、3はホールドの使用困難。

冰雪下のホールドは掘り出して使う。ビレイの岩角が制限される。これ等の条件下にクランポンを穿きこなすことが最も重要な基礎的技術であると述べている。

### B. 冰雪登攀の原則

足を中心としたバランスとリズムの原則が常に適用される。斜面に直立する。軟らかい雪の場合は、足を雪面に持ち上げず、一方の足を持って溝を作り、他方の足でしっかり踏み固めた足場を作る心持で歩く。雪崩れの危険あるときは真っ直ぐに登り、電光形を作ってはならない。傾斜が強いほど足場を固めることに注意し、人数の多いときは特に先に人の作った足場を丁寧に扱って壊さないことが大切だ。深雪ではピッケルを垂直に雪中に押し付けることは極めて優秀な支持を与える。夏のややきつい雪渓、凍雪などでクランポンを使用しないときは靴の側面で角付けする気持ちに蹴って電光形に登るが、軟らかい凍雪では靴先を少し下向け気味に強く蹴りこんで真っ直ぐに登る。新雪の下降も同様に斜面向きが良い。硬い凍雪、氷の急斜面もクランポンの歩行術で対応し、足場切りが少なくなっている。クランポン技術の原則は、①クランポンの刃を完全に全部食い込ませる。②静かに、注意深く、すっきりと、考え深く登る。③岩面に張った氷には特に注意し、破碎しない。同時に歯にたまった雪に注意。④弾力的に身体全体で歩く。⑤不安その他の消極的観念を去る。この原則の遂行のために、鉄の勇気、平衡感覚、よく動く足関節が必要。個人差があるが、独の熟達者の標準は65度の傾斜に対応できる。70度以上では誰もがカッティングを要し、60度以上の傾斜では下降に足場か、懸垂が必要としている。

「マウンテン・クラフト」第7章ICE AND SNOWCRAFT、Ice Craft節、282頁から284頁に架けてバランスクライミングの重要性を切々と説いて、後の頁でも説き、ロッククライミングのバランスがそのまま通用すると述べている。ついで氷の性質、クランポンと書き進み、クランポンのフラットフットイングはスラブで蛙歩きしたクライマーには苦もなく出来ると述べている。登攀可能角度は70度かそれ以上と記している。これらが「岩登り術」に充分反映されているように思える。「岩登り術」本文は足場切りの記述に進むのであるが、クランポンが積極的に使われて簡単な氷壁では足場切りが行われなくなったことと、本邦の冬山ではさらに重要ではないという理由で、本稿では省略した。

なお、「岩登り術」には雪の説明が上記のみで、極めて少なく、上記のラッセル法の記述に疑問もあるが、「マウンテン・クラフト」には雪庇も含めて非常に詳しく述べられている。学生を中心とした冬季ヴァリエーションルートの冬期登攀に情熱を傾けた人々が、詳しく読んだであろうことは想像に難くない。



登攀基地  
(朝日新聞社編『冰雪に挑む』昭和15年発行)

## C. 氷雪上の確保の原則

氷雪上の確保は岩と雪に於けるよりも遥かに困難であり、足溜まりの作成、ビレイ用の岩の選択などに確実さが求められる。

### a. 夏雪又は軟らかい雪上の確保

#### 第一法

ピッケルを出来るだけ深く差込み（斜面の方に寝かせて）中間ザイルを柄の向こうを通らせ両手を以ってザイルを握る。片手を以ってピッケルを押し、片手でザイルを握るのは不確実だから、ザイルの出し入れはピッケルを片膝で支え、ザイルに衝撃が来る時は、ピッケルに全身を押し付けて備えるとしている。

#### 第二法

足場に立ち、肩がらみを行う。先頭が2番を確保する場合は自己確保不要。先頭を確保する場合は中間ザイルの手近の部分に小フューラー結びを作りピッケルの柄をこれに通して深く雪に刺す。これ等の確保の際、墜落時にザイルを引き締めることは重要だ。確保は控えめより余計な位にやる方が正しいと述べている。

### b. 氷の上の確保

アイスハーケンをビレイと自己ビレイとに使う方法を推薦している。氷の質に注意して、使用するアイスハーケンを選択する一とある。

## D. クレヴァスの技術

本邦の冬期登攀には不要な技術であるため本稿では省略した。

## E. 氷雪中の露營

氷洞（雪洞）の利用を第1として、そのかなわぬ時は、ツダルスキー袋（ツエルト）の使用をと述べている。

以下は冬期登攀に直接的な重要性を持つものがあるが紙数も尽きたので詳述を避け、目次のみを記した。

## Ⅲ. 突発事故に対する適応と救急処置

- A. 落石
- B. 雪割れ
- C. 蜂の襲来
- D. 墜落
- E. 遭難及び救援
- F. 救急処置

## 第10章 練習の原則的方法

- I. 練習の基本
- II. 実際練習の原則
- III. 個々の技術の練習
- IV. 所謂「講習」に就いて
- V. 大登山への進出記録とその発表

## 第11章 素質と準備訓練

### I. 身体の素質

- A. 健康
- B. 体姿
- C. 筋肉
- D. 敏捷さ
- E. 感覚器
- F. 馴化

### II. 精神的な素質

- A. 精神の健全
- B. 細心
- C. 闘志
- D. 持久力
- E. 協和性
- F. 位置判別力
- G. 山の知識

### III. 身体の準備と訓練

- A. 体操
- B. 水泳、スキー
- C. 小さな岩場の練習
- D. その他の訓練
- E. 生活上の節制



スキー

## 第12章 服装、装備、食料

- I. 服装
- II. 履き物
- III. 装備
- IV. 食料

## 第13章 関西の岩場

### 3. 結論

以上に見たように、「岩登り技術」は「マウンテン・クラフト」の内容を良く反映していると思われる、両書が補完して本邦主要山岳のヴァリエーションルート冬季登攀発展に役立ったであろうと推論した。

(岳僚山の会)

## Ⅶ. 京都帝国大学旅行部の極地法による富士大沢口冬期登山について

松永 敏郎

「按に鳴沢の説緒家異同あれども今大沢と称する深壑即是なり其頂辺を親不知子不知と名づける、剣ヶ峰と雷岩の間に避け西に下る

大沢を俗に石滝とも云ひ一滴の水なしと雖磊塊の石の流下すること水のごとく混々止まず激衝して轟鳴を発する遠雷をきくが如し」  
(大日本地名辞書)

富士大沢は剣ヶ峰大沢とも呼ばれる。北東から頂上に到る吉田大沢と異り、その様相は厳しい。上部は西面して南アルプス連峰に対峙し、水のない谷になって続く、下流域は上井出の集落に接している。

1931年(昭和6年)5月に京都学士山岳会(A・A・C・K)を結成したばかりの彼らが、何故富士大沢を取り上げたかは不明ではあるが、「極地法」を実体験する為に海岸線にほど近い富士駅をベース・キャンプに想定したとすれば、富士山頂上までの3776メートル迄の行程は全く登り一方であり、地形図を見ただけでも険しい予定ルートは、未知のヒマラヤへの憧れを抱く彼らの登行意欲をそそったのではなかろうか。

同年12月末、彼らが京都帝国大学旅行部として富士駅から上井出を経て富士大沢の三股から雪の山頂に達し、クレーター内部の西賽(にしさい)ノ磧(かわら)に最終キャンプを設け、三隊に分かれた隊員が交替で滞在。四日間、夏山用のテントで厳冬の雪中露営を敢行、頂上の剣ヶ峰登頂から、いわゆるお鉢(はち)廻(めぐ)りにも成功して全員無事下山をしたのである。今から遡ること78年、日本で最初の「極地法」登山であった。

当時、冬期用のテントはもちろんなかった。材質も化学繊維製品は皆無、綿製の生地が一般的であった。

「極地法」はポーラー・メソッドの訳語である。この富士登山の隊員であった伊東愿氏(学生)がアサヒ・スポーツ誌上への報告で1932年(昭和7年)に初めて使った用語である。読んで字の如く、探険で極点に到達してベース・キャンプへ無事に戻って来るために、順次キャンプを作って物資を輸送、人員の配置など安全を確保しながら前進する。1911年(明治44年)南極点に初めて立ったアムンゼン隊の採った方法であり、登山に関しては1922年(大正11年)の英国エベレスト偵察隊以来、ヒマラヤでの登山を目的とした多くの隊が行って来た形式である。

用語もタクティクスも初めてそれに接した京大旅行部は、今西錦司・西堀榮三郎氏ら優れた先輩達の指導の下に、その精鋭を結集してこの新しい登山を試みたのである。

1929年(昭和4年)カンチェンジュンガに遠征したババリア隊の報告がパウル・バウアーによって記され出版されたが、これを翻訳し、「ヒマラヤに挑戦して」の題名で世に出したのは、実は前述した学生の伊東愿氏だったのには驚かされた。彼が1931年(昭和6年)の9月「京都帝大旅行部ルームに於いて」記した記者のことばの一部をここに写せば、この一冊を熟読、種々を検討した彼らが、どのような意欲で富士山における極地法登山研究に対したかが分かるだろう。

「(前略) この報告書は些さかのジャーナリズムもなく、また少しの粉飾も加へてない。然し、そこに盛られた精神こそは我々の世界を無限に押し拡げずには措かないものである。この登攀記は甚だ簡潔であるが、我々にはこれによって、ヒマラヤン・エクスペディションに大変革をもたらした彼等ババリア隊のシステム、彼らの独創性、彼等の真価を充分に窺知することが出来る。尚、一般記録の外に、食糧・装備・写真等のエクスペディションの準備に就いての記載

が為されてゐる。就中、その経費の公開は、我々に取って何物かを暗示せずには措かない。

要之、この書は、ヒマラヤ登山の報告書としても白眉、而かも、「如何にしてヒマラヤン・エクスペディションを為すべきか」を教える、親切をきはめた新しいテキスト・ブック、注意深く読まなければならぬ貴重な文献である。(後略)」

この富士登山の公式報告書は、日本山岳会の年報『山岳』第27年第2号(昭和7年9月20日刊行)に、「富士大沢口冬期登山」として隊員の遠山富太郎氏(学生)が執筆。同氏は特にこの山行での食糧についての報告を『関西学生山岳聯盟報告』第三号に詳しく記しているが、その前書きには

「今度の行は、大澤口登攀が新しいバリエーション・ルートである以上に、わが国で最高の冬期幕営が合理的なパーティの進行によりなされた点に一つの意味があると思ふ。」

と述べており、實際を㊤中道小屋以下(キャンプⅢ及Ⅰ)と㊦ハイ・キャンプ(Ⅳ・Ⅴ)毎に分類、それぞれに食事・器具・燃料・携帯食から飲物に至る迄を詳説して興味深い。現代の登山愛好家にも是非一読を奨めたいと思う程である。

前述の文章に続いて

「ナレイティブ(物語り体に記した報告)は既に(昭和7年2月に刊行の)朝日スポーツVOL10, NO3・4に伊東愿により書かれ、と紹介されていた文章で探した「ポーラメソドによる富士登山」は、京大関係者にも所有者はなく、あわや、資料として一読も不可能かと落胆しかかっていたが、誠に偶然ながら、伊藤氏の次女に当たる松方恭子さんの編で、2008年7月発刊の「妻におくった九十九枚の絵葉書—伊藤愿の滞欧日録—」に、実に76年ぶりに、その全容が再び目前に展開されたのは、我々にとって幸せであった。当時、初めてのバリエーション・ルートによる富士山の冬期登山と、山頂内院での夏用テントによる幕営生活が、A・A・C・Kの先輩・後輩諸氏の抱いていたヒマラヤの山々への深い憧憬と、その登山そのものへの強い意欲と協調の精神に支えられていたことが十二分に理解できるものだと言えよう。」

当時使用したであろう地形図に、敘述された文章に従った彼らのおおよそのルートを記し、行動表を掲げて参考に供した。

その後、京大旅行部は、1934年(昭和9年)12月から翌年1月にかけて朝鮮の最高峰である白頭山に遠征し、極地法によって登頂に成功、一般にも極地法が理解されることになったが、1940年(昭和15年)4月には「富士山に於ける空地連絡試験」を行い、『山岳』第36年1号に概要を報告している。はしがきには

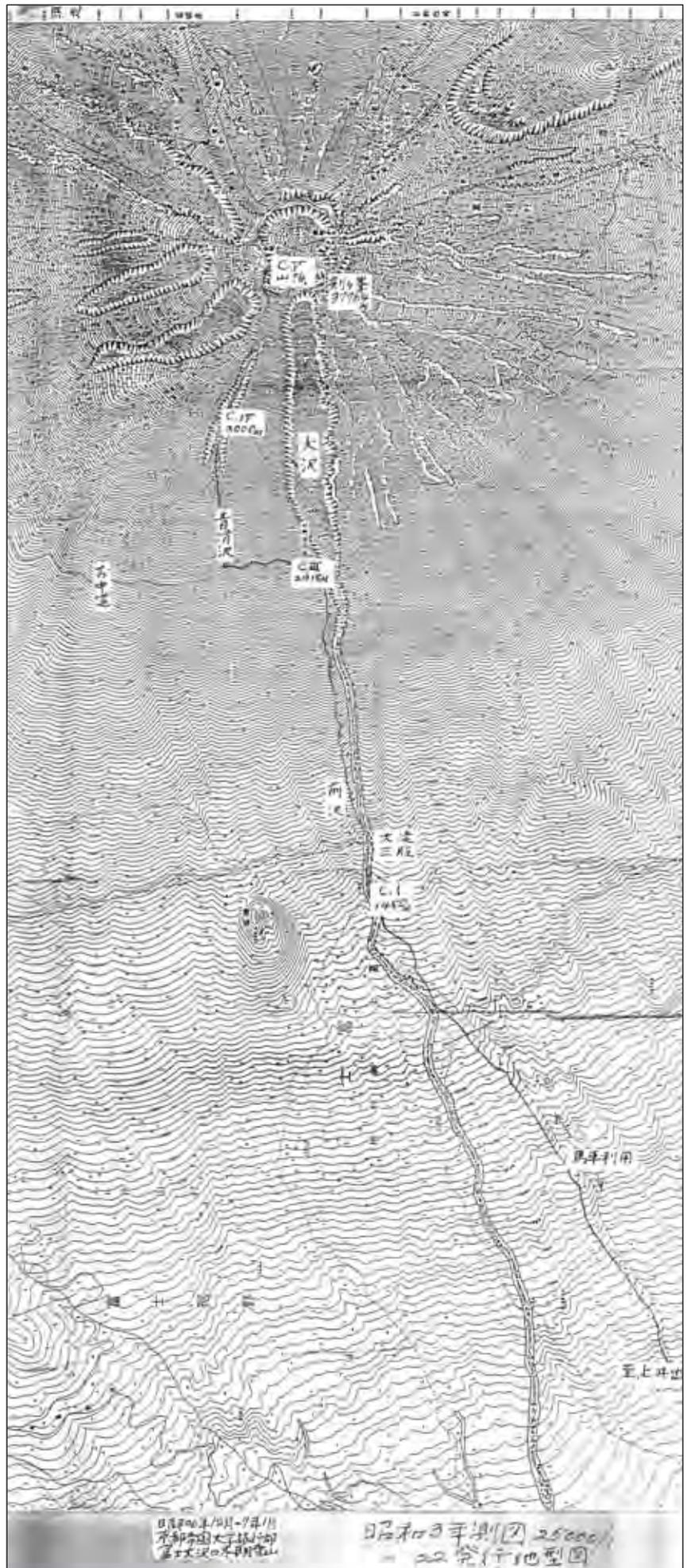
「(前略) 今回の参考の目的は、富士山の登攀そのものにあるのではなく、無線電話、飛行機、反射鏡、布板信号、発炎筒等により生ずべき危険を考慮してかくもいろいろの物を持ち出して来たのではなく、かかる各種の実験をすることによって、登山、広野踏破或は密林地帯の通過行進等において、実際にどれだけ利用価値の有るものであるかを知り、かくてこれ等個々の実験が「登山に於ける—」或は更に進んで「探検に於ける—」といふ一つの中心観念の下に統一されて、従って如上の意味において我々の世界に広さと深さと更に強さをもたらし度いといふのが我々の切なる願望であった。(後略)」

この富士山極地法登山は日本最初の試みであり、翌1932年（昭和7年）に予定したヒマラヤ、カブルー（7338メートル）峰の遠征に備えたものであったが、1931年（昭和6年）の満州事変の勃発もあって中止された。翌年は五・一五事件、また滝川事件なども含めて日本の国情は急速に逼迫し、ヒマラヤ登山の可能性は失われていった。

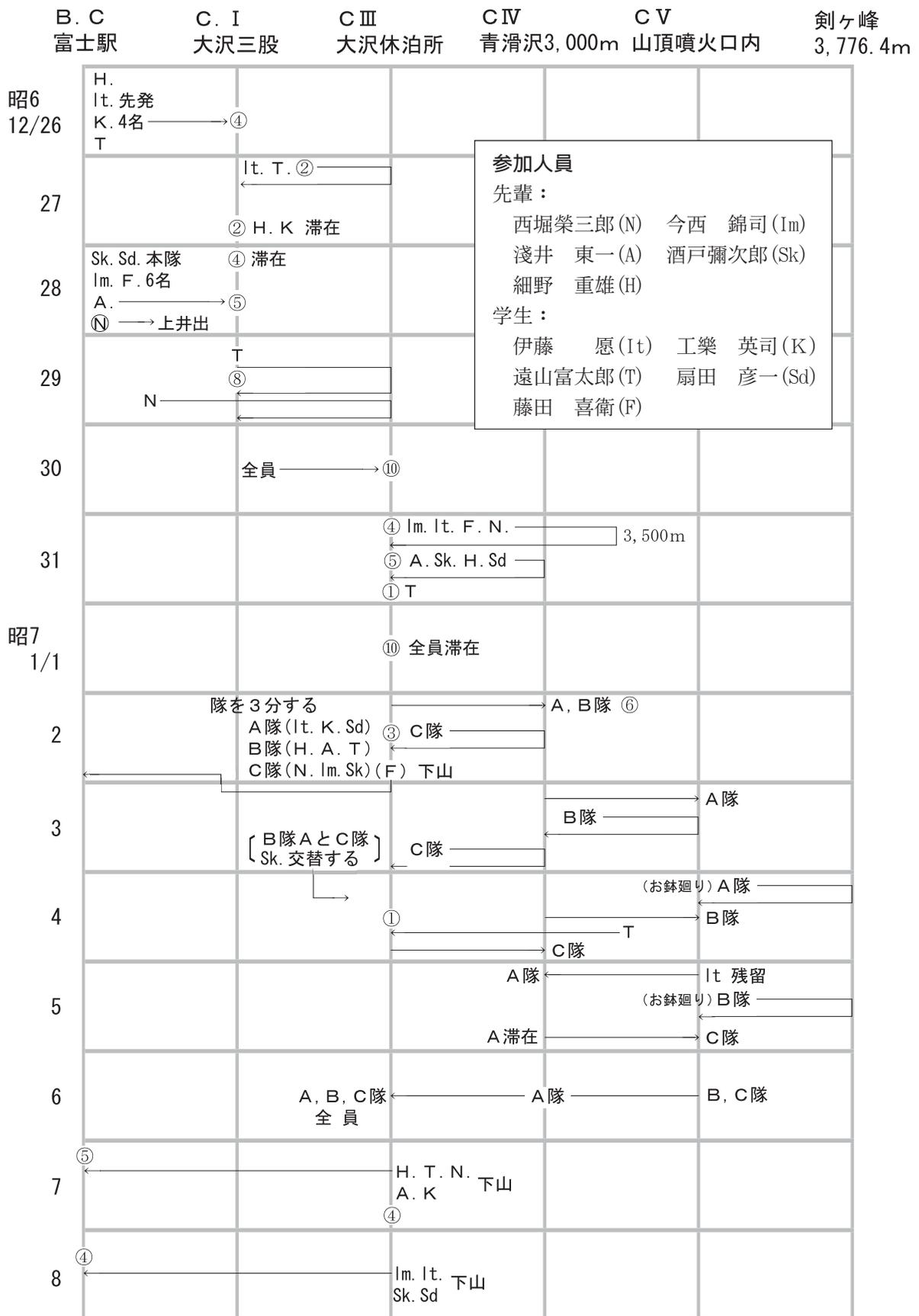
しかし、この登山の様式は、京大登山人の多くが持つ将来への視野と旺盛な研究意欲、安定したチーム・ワークを基盤にした実行力に支えられて、大戦後の日本登山界の発展にも大きく貢献したのであった。

説明の御理解を容易にするために、ルート概略と極地法展開図を掲示した。御一覽願いたい。

（日本山岳会・国学院大学OB）



富士大澤口 冬季登山の極地法展開図



最初の計画では、C I と中道との間にC IIを設け、中道小屋（大澤休泊所）を期待せずに、その付近にC IIIを設ける筈であった。呼びなれたままに中道小屋をキャンプⅢと称す。（従ってC IIは存在せず。C IIIには小屋を使用した）

## VIII. 積雪期を中心とした鹿島槍ヶ岳登山史年表

年 代	事 象	報告者
天保14(1843)年7月	後立山(鹿島槍)検分登山、小川温泉から	佐伯有次郎
明治38(1905)年10月	日本山岳会創立	
明治42(1909)年8月	鹿島槍ヶ岳登頂、大黒銅山から	三枝威之助
明治43(1910)年7月	鹿島槍、針ノ木、五色ヶ原、薬師、槍縦走	三枝ら
明治44(1911)年7月	鹿島槍ヶ岳 大黒銅山から	中村ら
明治44(1911)年8月	鹿島槍ヶ岳から槍ヶ岳縦走	榎谷徹蔵
大正6(1917)年7月	後立山完全縦走	木暮理太郎、田部重治
大正8(1919)年7月	北アルプス横断(剣沢～牛首尾根)	近藤茂吉
大正10(1921)年9月	アイガー東山稜初登攀	榎有恒
昭和1(1926)年3月	鹿島槍ヶ岳北峰登頂	浜田和雄(一高旅行部)
昭和2(1927)年12月	針ノ木雪渓遭難	近藤正ら4名 『リュックサック』
昭和4(1929)年12月	白馬岳登頂	高木英二ら 『針葉樹』5
昭和5(1930)年3月	白馬岳～唐松岳縦走	交野武一 『炉辺』5
昭和5(1930)年3月	唐松岳～白馬岳縦走	堀田弥一 『立大部報』2
昭和5(1930)年12月	鹿島槍ヶ岳登頂	堀田弥一 『立大部報』3
昭和6(1931)年3月	黒部～鹿島槍ヶ岳、五龍岳	小原勝郎 『立大部報』3
昭和6(1931)年3月	唐松岳～鹿島槍ヶ岳縦走	伊藤愿 『関西学連報告』2
昭和6(1931)年10月	鹿島槍ヶ岳北壁主稜登攀	伊藤愿 『関西学連報告』3
昭和7(1932)年12月	白馬岳～種池縦走	斯波悌一郎 『立大部報』5
昭和8(1933)年3月	天狗尾根～鹿島槍ヶ岳北峰、北壁試登	小原勝郎 『立大部報』5
昭和8(1933)年4月	三の沢～東尾根～鹿島槍ヶ岳	田口二郎 『関西学連報告』4
昭和10(1935)年3月	鹿島槍ヶ岳北壁右ルンゼ	中村英石 『関西学連報告』
昭和11(1936)年1月	鹿島槍ヶ岳北壁主稜	村田愿 山崎 『穂高星夜』
昭和12(1937)年3月	鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁北稜	小谷部全助 『針葉樹』9
昭和16(1941)年3月	鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁南稜	佐谷健吉 『日本山岳会会報』107
昭和31(1956)年6月	鹿島槍ヶ岳北壁正面尾根	登嶺会 『岳人』114
昭和41(1966)年	鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁南稜の成功と北稜の遭難	紫岳会 『岳人』218
昭和42(1967)年5月	爺ヶ岳西俣奥の稜	大町山の会 『岳人』239
昭和42(1967)年5～6月	鹿島槍ヶ岳一周	大町山の会 『岳人』239
昭和42(1967)年5月	鹿島槍ヶ岳北壁中央ルンゼ	門司山岳会 『岳人』248
昭和43(1968)年5月	鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁の北壁	昭和山岳会 『岳人』262
昭和44(1969)年5月	天狗尾根～荒沢<スキー>荒沢尾根	元井芳正 『岳人』309
昭和45(1970)年12～1月	後立山縦走	山口大学 『岳人』294
昭和47(1972)年	不帰二峯東壁・上部三角形岩壁	関西クライマースクラブ 『岳人』308
昭和47(1972)年	鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁南稜	東京緑峯山岳会 『岳人』298
昭和48(1973)年12～1月	鹿島槍ヶ岳荒沢尾根	東京こぶし山の会 『岳人』331
昭和49(1974)年	スバリ岳中尾根～爺ヶ岳	大町山の会 『岳人』331
昭和54(1979)年3月	鹿島槍ヶ岳から剣岳	竹中昇 『岳人』385、386

## IX. 鹿島槍ヶ岳登山史関係 参考文献

### 〔大学山岳部部報等〕

- 昭和4年(1929) 立教大学山岳部 『立教大学山岳部部報』 第一号  
昭和5年(1930) 立教大学学友会山岳部 『立教大学山岳部部報』 第二号  
昭和6年(1931) 立教大学学友会山岳部 『立教大学山岳部部報』 第三号  
昭和7年(1932) 立教大学学友会山岳部 『立教大学山岳部部報』 第四号  
昭和8年(1933) 立教大学学友会山岳部 『立教大学山岳部部報』 第五号  
昭和9年(1934) 立教大学学友会山岳部 『立教大学山岳部部報』 第六号  
昭和10年(1935) 立教大学学友会山岳部 『立教大学山岳部部報』 第七号  
昭和11年(1937) 立教大学学友会山岳部 『立教大学山岳部部報』 第八号  
昭和16年(1941) 立教大学学友会山岳部 『立教大学山岳部部報』 第九号  
昭和10年(1935) 東京商科大学一橋山岳部 『針葉樹』 第八号(東京商大山岳部部報)  
昭和34年(1959) 早稲田大学山岳部 『リックサック』 -早稲田の山- (早大山岳部部報) 朋文堂  
平成12年(2000) 稲門山岳会・早稲田大学山岳部 『リックサック』 80周年記念号(1920~2000)  
昭和4年(1929) 関西学生山岳連盟 『関西学生山岳連盟報告』 第一号  
昭和6年(1931) 関西学生山岳連盟 『関西学生山岳連盟報告』 第二号  
昭和7年(1932) 関西学生山岳連盟 『関西学生山岳連盟報告』 第三号  
昭和7年(1932) 関西学生山岳連盟 『関西学生山岳連盟報告』 第四号  
昭和9年(1934) 関西学生山岳連盟 『関西学生山岳連盟報告』 第五号  
昭和9年(1934) 関西学生山岳連盟 『関西学生山岳連盟報告』 第六号  
昭和10年(1935) 関西学生山岳連盟 『関西学生山岳連盟報告』 第七号  
昭和12年(1937) 関西学生山岳連盟 『関西学生山岳連盟報告』 第八号

### 〔一般図書等〕

- 昭和8年(1933) 水野祥太郎 『岩登り術』 黒百合社  
昭和32年(1957) 吉田二郎 『鹿島槍研究』 朋文堂  
昭和33年(1958) 山崎安治 『穂高星夜』 朋文堂  
昭和36年(1961) 諏訪多栄蔵ほか編 『現代登山全集』 4〔白馬 不帰 鹿島槍〕 東京創元社  
昭和36年(1961) 諏訪多栄蔵ほか編 『現代登山全集』 2 東京創元社  
昭和56年(1981) 柏瀬祐之ほか編 『日本登山体系』 6〔後立山 明星山 海谷 戸隠〕 白水社  
昭和61年(1986) 堀田弥一 『ヒマラヤ初登頂-1936年のナンダ・コート』 筑摩書房  
大正9年(1920) G. W. Young 『Mountain Craft』  
大正14年(1925) 藤木九三 『岩登り術』 三祥堂  
昭和7年(1932) 『山岳』 日本山岳会 27-2号  
昭和16年(1941) 『山岳』 日本山岳会 36-1号  
平成19年(2007) 『山岳』 日本山岳会 102号  
平成20年(2008) 松方恭子編 『妻におくった九十九枚の絵葉書-伊藤愿の滞欧日録』  
清水弘文堂書房  
昭和45年(1945) 今西錦司 『山と探険』 文藝春秋社  
平成3年(1991) 『西堀榮三郎選集』 第一巻 悠々社  
昭和6年(1931) パウル・バウアー著・伊藤愿訳 『ヒマラヤに挑戦して』 黒百合社

## 謝 辞

---

本企画展開催にあたり、下記の個人・団体の皆様並びに関係機関から、貴重な資料の提供や調査に際して多大なご協力・ご後援を賜りました。ここにご芳名を記して心より感謝の意を表するとともに厚くお礼申し上げます。

なお企画展準備中の4月末、本企画展の監修・執筆・講演をご依頼していた方のおひとり、京都府立大学生命環境科学科助教の伊藤達夫先生が、北アルプス鳴沢岳で二人の学生とともに亡くなられるという悲報が届けられました。日本を代表するクライマーであり、同時に登山史にも精通し、昨年には山岳博物館発行『山と博物館』（第53巻7・8月号）に二ヶ月に亘って「黒部に逝った信州の名猟師小林喜作」をご出筆頂いたばかりでした。黒部の谷を軸に、その谷を挟みこむようにそそり立つ岩峰・北アルプスを主なフィールドとした幾多の記録は、永く人口に膾炙され、語り伝えられていくことでありましょう。ご冥福をお祈りし、これまでの学恩に感謝を捧げます。

### 大町山岳博物館

#### 〔個人〕

伊藤 達夫	松永 敏郎	宇津 力雄	児玉 茂	松本 憲親	齋藤 一男
西本 武志	砂田 定夫	佐々木誉実	酒井 國光	佐伯 郁夫	成川 隆顕
宮澤美渚子	加藤 智司	麻植 正弘	木下 守	榛葉 伸男	栗原 久
松本 武子	荒井 泰三	山田 新			(敬称略)

#### 〔団体〕

東京農業大学山岳部 大町山の会 松本市立博物館附属施設旧制高等学校記念館  
大町民話の里づくり「もんぺの会」(松本武子・中沢一夫・峯村徳子・仁科光子・藤沢伸稔  
新芝久子・黒岩礼子・高橋さき子・荒井泰三・荒井典文・平林信子・菅澤奎子) (敬称略)

---

#### 企画展 「アルピニズム誕生 昭和初期の鹿島槍ヶ岳登山史」

---

発行日 平成21年(2009)7月4日 発行  
発行・編集 市立大町山岳博物館  
〒398-0002 長野県大町市大町8,056-1  
TEL.0261-22-0211 FAX.0261-21-2133  
URL: //www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/  
E-mail: sanpaku@city.omachi.nagano.jp

---